
シキま！？

もち丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シキま!?

【Nコード】

N6046J

【作者名】

もち丸

【あらすじ】

『ネギま!?』の世界に、神様の暇つぶしで『色使い』こと 鳴神 色 ナルカミ シキ が現れた。

彼の使命は、ただ一つ……神様の依頼『原作なんぞどうでもよい、妾を楽しませてくりやれ』

史上最大級の神様の暇つぶしに巻き込まれた少年の物語をとくと御覧あれ。

注意：この作品は、半最強系なので苦手な方は気合を入れてください。

プロローグ（前書き）

まず、この作品を見つけてくれてありがとうございます。

作品中の用語はあとがきにて説明いたします

それでは、『シキマ!?!』をおたのしみください。

プロローグ

「……の部屋」

「あー……疲れた」

眩しい光があたりからひくと、懐かしい部屋が目の前に広がってきた。

懐かしいが、部屋は、俺が最後に来た時から全くと言っていいほど変わっていない。

確か最後に来てから100年くらいたったのにな……

俺が今出てきた世界玉はもちろん、照明からディスプレイの位置すら変わっていない。

まーそんなことより。

「おーい ミラ！帰ってきたぞ」

「おおっシキ帰ったか」

俺が言い終わったその瞬間に背後から白い華奢な腕が現れると、その腕の持ち主である少女が俺におんぶされるような形で抱きついてきた。

「背後に転移してくるなよミラ
いっつも言ってるよな」

「よいではないか、久々に会えたのじゃ
楽しまなくてどうする」

俺の背中嬉しそうにはしゃいでる少女を抱きかかえるようにして
俺の正面に移動させる。

少女……ミラは、深みがかった青というよりも蒼髪を腰より長く
のばし、大きな蒼い瞳を持ち黙っていればセイレーンと言われても
疑われないほどの美少女なのだが、実際は背後から抱きついてくるな
どと、かなりのおてんば姫と言ったところだ。

しかし、ミラは見た目こそは16歳程度の美少女であるが実際は年
齢などの概念が通じないほど、宇宙とともに生まれた神様であるか
ら全ての中で一番の古株であるのは疑い用がないのだ。

ちなみに俺はミラによって地球とともに生まれた存在であるからミ
ラからしてみれば赤子同然なんだろう。

「ん？どうしたのじゃシキ？

さっきからジツと熱い視線を妾にむけてきよって見惚れておったの
か？のか？」

ニヤニヤとそれでいて憎めない笑顔を浮かべ手を腰にあて仁王立ち
している。

「あーそうだな、見惚れていた」

「っな！？……何を言うとするーいや！見惚れおったのか／＼シキが

「そうか、仲良く出来るのなら最初からしておけば良いものを……
まーよいか、して、色はどうだったかえ？」

若干顔が紅いが正気に戻ったようだ。

「そうだな、この世界は魔法自体が色で分けられていたから、黒と
白魔法の色なら全て吸収できたから上々だな。

あと、分かれる時にセフィロスから召喚獣のマテリアを貰ったんだ
けどどうする？」

俺はそう言いながらポケットから手のひらに収まる程度の玉を取り
出した。

「そうじゃな、シキが貰ったのじゃから自由にするがよい」

「そうだな。じゃあ」

マテリアを宙に浮かべ、俺は腰から筆を取り出して軽くマテリアを
撫でる。

すると、マテリアから色が抜けていき、遂にはただの白っぽい石に
なった。

「いい色じゃな」

ミラが見つめる俺の手の上には、色を抜かれる前のマテリアと同じ色をした絵の具がある。

「よし、確かにいい色だな。

さすがはバハムートと言ったところだな」

「そうじゃな、ではシキよ

そなたに次の依頼を要求する」

「ちょっとミラ！あんまりだろ？とりあえず休ませてくれよ」

これでもFFの世界でかなり疲れたんだ。

しかし、ミラはウキウキと俺のことなど気にせずニヤニヤと笑っていやがる。

「だめじゃ。仕事は仕事。

プライベートと一緒にしてはならぬ。

ということぞ、依頼を言うぞよ」

ミラが天に手をかざすと虚空から世界玉が現れた。

「この世界で『原作なんぞどうでもよい、妾を楽しませてくりゃね』」

「ちよっ！！あんだ、プライベートと仕事いっしょにしてんじゃねえーかよ」

俺のツツコミなど笑顔一つで流し、ミラが世界玉を少し高く持ち上げると眩いばかりの光が部屋を埋め尽くした。必死になって抗ってみたのだが、神様相手にかなう訳もなくズルズルと世界玉の中に吸い込まれていく。

「あと、原作の500年前に設定したから、そこで金髪幼女を助けてあげてね」

それが俺が世界玉に飲み込まれる前に聞いた、ミラの最後の言葉だった。

――
――
――

プロローグ（後書き）

いきなり意味分からなくてすみません。
シキの色使いとはなんなのか？などいろんな謎を提示しては暴いて
いこうと思います。

世界玉 セカイキユウ

それひとつでひとつの世界を表わす。

地球はひとつであるが、世界玉は地球の様々なパラレルワールドを表しているものと考えられる。

鳴神 色 ナルカミ シキ

ミラによって地球と一緒に生み出された地球の管理人。

しかし、実際はミラの遊び相手といったところ。
能力として『色使い』がある。

ミラ

宇宙とともに生まれた創成の神。

金髪少女と色使い

目が覚めるとそこは、森でした。

「ってなんでやねん!？」

しまった……

突然すぎてモノローグに突っ込んでしまうとは。

「ミラのやつー覚えとけよ!！」

とにかく冷静になってあたりを見回してみると、森なのである。どこからどう見ても木々が生い茂り川が流れ小鳥の囀りとともに、あの土臭さまであるここは森で間違いないだろう。

おかしい……今まで世界玉で移動してきたら火山の火口ギリギリだったり、深海4000mに縄でくくられていたり砂漠で飲まず食わず1週間と、ミラに好き放題にされてきたのだ（おそらくミラの暇つぶしのたむめに）

だから、森ではおかしいのだ。

確かに森が危険ではないと断言は出来ないが、この程度でミラが満足する訳がない。

突然この森が燃え出しても俺は慌てずに行動できる自信がある。人間覚悟して挑めばかなりのことは乗り越えられるものなのだ。

『こらあー魔女め！出てきやがれ！！』

ん？？川の対岸から野太いおっさんの声が聞こえてきた気がしたのだが。

『いい加減出てこい！殺してやる！！』

確実に川の対岸の森にいる。

しかも、声からしてこちらに近づいて来ている。

しかし、さつきからどうも殺すだのと物騒なことを言っているのだが、この森に罪人でもいるのだろうか？とにかく今は情報が少なすぎる。

せめてここが何処なのか程度は知らなくては依頼を遂行することすらできやしない。

「だれかいるのかー？いたら返事してくれ！」

とりあえず川の対岸に向けて叫んでみた。

すると、対岸側の森から「なんかきこえたぞ」「川の方からだ」などと複数の声が次第にこちらに近づいてくるのがわかる。

そして遂に川の対岸に20人位の屈強そうな男たちが、鎌や桑といった農具を持って集まって来た。

「悪いが遭難してしまっただ。ここが何処なのかも分からない。誰か教えてくれないか？」

言った後に思ったのだが遭難だなんて流石に無理があるか？そんな考えを浮かべていたのだが、対岸の男達はざわつきそして、真ん中にいた男が一步前に出てこつちを睨みつけて来た。

「ここはイギリスのウェールズの森だ。質問には答えてやった、次はおまえが答える番だ。何故ここにいる？この森は先週から封鎖されているのだからそうやすやすとはいれるワケが無いはずなんだが」

イギリスかー懐かしいな。
前に来た時はソロモン王の悪魔と戦った時だからな。

「そうか。あとどうやって来たかと言われても気づいたらここにいたとしか言い用が無いのだが。
それよりさつきから騒がしいがなんかあったのか？」

それを聞いた男の顔がより厳しくなっていくのが遠目からでもわかる。

「そんなことも知らないのか？」

今この森に魔女が逃げ込んでいる。だから俺達は魔女を倒そうと先週から追いこんで、やっと昨日魔女の右手を切り落とすところまで追いこんだのだが、逃げられてしまつてな。

兄ちゃんも悪いことは言わねえー早くこの森から抜け出さな」

魔女か。

つまり今は中世のイギリスで魔女刈りの真っ最中つてワケだな。

それにしてもよく農民だけで魔女の片腕をもぎとれたな。

農民でも数打ちや当たるつてか？それとも魔女が弱いだけなのか？とにかく今は返事でもしておこう、もちろん魔女も見ないで森出るなんて野暮なことする気ないがな。

「わかった。わざわざありがとな」

「おう！兄ちゃんも気をつけなよ。なんたつてその魔女は人の生き血を吸うらしいからな」

そう言うと男達はゾロゾロと森の中に消えて行った。

「血を吸う魔女ねー」

おそらく魔法を操る吸血鬼で間違いないだろう。

それなら農民に遅れを取つたのだから納得出来る。

恐らくその吸血鬼はまだ陽の光には弱いだろう、農民達は昼に散

策する筈だから吸血鬼にとっては最悪の状況なのだろう、しかし、300年ほど生き延びれば真租なら確実に弱点なんてなくなるはずだ、ってことはこの森にいる吸血鬼はまだなりたてなの新人なんだろう。

とにかくやることも無いことだし吸血鬼探しでもしましょうかね。

「色の基礎でもやってやれば見つかるだろう」

そして俺は森を見渡す。

集中すると森の色が疼きだす。その中から弱々しい色を見つけだせばいいのだ。

ちなみに俺が言う色とは人間がいう精霊や生命エネルギーと同じだと思っただ構わない。

「川の上流……あっちか」

俺は歩き出した。

く川の上流付近く

「ここだな」

川の上流は、湧き水による泉を囲むように木々がはえている。その光景は、素直にきれいだという言葉が出てくるほどだ。そして、泉のそばには何故かくたびれた小さな教会がたてられており、そこから色の力が弱い生き物の反応が出ている。

「にしても吸血鬼が教会とわね」

愚痴を言ってもしかたがない。

とにかく教会にいけばなにかしらアクションが起きるだろう。

「うっー痛い、いたいよ……グス……」

???

今中から子供の、少女の泣き声が聞こえてきた気が……

「……いたいよ、なんで治らないのよ……グス」

間違いない。

俺は確信を持って教会の扉を開いた。

「っ！！だれ！？」

中は、真っ暗で僅かに壁の隙間から光が差し込んでいるおかげで、どうにか視野を保てる程度だ。

「私を殺しにきたの？殺しにきたんでしょ？」

教会のカーペットの1番奥、十字架の下に彼女はいた。

ところどころ破れた元々は白かったたろうドレスに、腰まで届く金髪と大きな瞳、まるでミラを12歳にしたような少女が疲れきった目でこちらをみている。

ミラのやつめ、これならマグマのほうがマシだって。金髪幼女を助けるってこれのことかよ。

「あー大丈夫だから、落ち着いて。

俺は君を助けにきたんだ」

俺が、そう言うと少女は目を大きく開いた。驚いてるって感じだな。

「とにかく腕見せて怪我してるだろ」

そして、俺が近づくと少女は意外にも無抵抗に無くなった腕を突き出した。

「はやくしてよ。毒で殺すんでしょ？それとも銀の剣で心臓でもついでみる？」

なるほど、あきらめつてやつね。

流石に一週間も、あの農民に追われて腕をもがれちゃ仕方ないか。

「随分な言い用だな？」

んーなるほど。腕をもがれたあとの傷跡に直接太陽を浴びたから吸血鬼の力でも再生しなかつたってわけか。

でもこんくらいなら3重色でおおるか」

そして、俺は腰から筆を取り出す。

それを見た少女は、諦めたかのように力のない瞳をしている。

俺は筆を虚空に振ると空間に亀裂が走りそこから3つのビンが現れ宙に浮かんでいる。

これで準備は整った。

筆を傷に向けて構え、3つのビンから白？白？青を取り出し混ぜ合わせ傷めかけて魔法陣を描く。

「癒しの力を 今ここに ケアルガ」

呪文を唱えると少女の腕があつた場所が光に包まれて、光が収まるとそこには、先程まであつた痛々しいキズはきえてかわりに本来の少女の腕がある。

「なっなんで？私、魔女なんだよ？吸血鬼だから血を吸うんだよ？なのになんで私を助けるの？助けてくれるの？」

少女は、自分の腕が元通りになつたことも含めて混乱している。

「だから言つたる助けてやるつて。

俺はただ言つたことを実行しただけだ、どうしてもこうしてもない」

そう言うと少女は、今までみた中で1番の驚いた顔になつた。

「あなた何者なの？なんなのさっきの魔法は？」

このセリフは、もう聞き飽きた。
どの世界に行っても言われてきた。
そして俺はいつも通りに答える……

「俺は魔法使いじゃない。
ちよっと普通とは違うただの色使いだ」

金髪幼女と色使い（後書き）

ケアルガ

FFより中位の回復魔法

本来は白・白であるが回復力をあげるために青を入れた。

吸血鬼と人形と色使い（前編）（前書き）

シリ阿斯系です。

吸血鬼と人形と色使い（前編）

『俺は魔法使いじゃない。

ちよつと普通とは違つただの色使いさ』

私は絶望して諦めていた。

10歳の誕生日の日、目覚めたら吸血鬼にそれも真祖の吸血鬼になつてた。

幸いなことに真祖であるから、人の血を吸わなくても生き延びることができたのだが、50年たつても姿が変わらない私を見て人は、私のことを『化け物だ！』『魔女に違いない』などと言ひ出し私を殺そうとした。

それでも死にたくなかつた私は、必死になつて逃げた。

必死になつて逃げたらとても悲しくなつた。

なりたくてなつたわけでも無いのに……

そう思つてからは、地獄のようだった。

私を吸血鬼にした奴を追つてある村に行くと、そこにあいつがいた。あいつは私の全てを奪つたのに、村で神父の真似事をしていたのだ。私は、その瞬間に憎悪に身を焦がれ憎しみをそのままあいつにぶつけると、あいつはあっけなく死んだのだ。

私の全てを奪つたあいつは、なんの抵抗もなく一瞬にして死んだのだ。

その瞬間、私のココロは折れた。崩れたのだ。

そんな私を見た村人は魔女だと騒ぎ立て「よくも神父様を！」と叫びながら私の片腕を農具で刈り、止めをさそうと農具を振り回して来た。

私は、また逃げた。

森の中へ逃げ込み、夢中になって走ると目の前に教会が見えて来た。私は教会の中に逃げ込んだ、なんて人生は皮肉なんだろうか？腕も何故だか再生しない、神父を殺して、私は教会で死ぬのだろうか？そう思うと、涙がこみ上げてきて私は嗚咽をもらしていた。

その時だった。

教会の扉が開くと、男が現れた。

男は、私と同じ金髪を肩まで伸ばしていて、顔は服装を見なければ女だと思間違いそうなほどに整った顔をしており、背は高いが幼さが残っており、年は16歳くらいであろう。

こんな男に殺されるならまんざらでもないな……などと考えていると、男は口を開いた。

『あー大丈夫だから、落ち着いて。』

俺は君を助けにきたんだ』

私は耳を疑った。

助けるだと？殺すのではなく？

そして、男は腕の傷を見せると言った。油断させて殺すつもりなのだろう。なんせ私は魔女なのだからな、用心するにこしたことはない。

男の言う通りに腕をつきだすと、男はしばらく観察をして腰から筆を取りだした。

私の最後とは、筆で殺されるのか？もしそうならば、とんだ笑い者

だな。

そして次の瞬間、私は目をみはることになった。

男が筆を振ると空間に亀裂が入りそこから3つのピンが現れ、触れてもいないのにピンの中から白と青の光が現れ、男はそれを筆で混ぜ、見たこともない魔法陣を私の腕めがけて描いたのだ。

描き終わると、男は始動キーも無しに聞きなれない魔法を唱えた。すると、私の腕があるであろう所が光りに包まれ、光りが収まると私の腕が元通りになっていったのだ。理解が出来ない。

私を本当に殺さずに助けたのだ。

何故なのかと聞いても、言ったことをしただけだ、みたいなことを言っているこの男は何者だろうか？

そして、男は答えた。

『俺は魔法使いじゃない。

ちょっと普通とは違うただの色使いさ』

それが、シキとの出会いだった。

くシキsideく

やっぱりなんの説明も無しにケアルガは、まずかったか？

目の前の少女は呆然と信じられないものを見たと言うような表情で
(まー実際そうなのだろうが)俺のことを見つめている。

すると、少女はその大きなきれいな瞳をウルウルさせて泣きはじめてしまった。

「おっおい、大丈夫か？」

まだ腕が痛いのか？それとも、吸血鬼にケアルガは、逆効果だったのか？」

あー訳わかんねえ。

俺がなんかしたのか？

すると、少女は涙を流しながらも俺を見つめて嗚咽交じりの声で話し出した。

「あつあのね……ヒグッ……いついたくなんかないの……ただ嬉し
いだけなの……グス」

少女はそう言いながら俺の上着の端をその小さな手で掴んできた。まるで、なにかにすがるように。

「ほんとに……ね、助けてくれるなんて思わなかったの……ヒゲッ」

なるほどね。

つまり、少女はこれまで魔女として追われることはあっても、助けられるということはなかったのだらう。

そして、俺に腕を治してもらったのがキツカケで涙が溢れたってところか。

取りあえず、一旦思考停止。

俺は、ミラにしたように視線を少女と合わせるために腰をかがめると、頭に手のひらを乗せて頭をゆっくりと撫でた。

「ああーまーあれだ。

何があつたかは聞かないけど、泣きたいなら我慢するな。

人生、我慢していいことないぞ」

俺がそう言つと、少女は今まで溜め込んできたものを吐きだすかのように俺の胸に頭を預けると、恥を知らない子供のように大きな声で泣き喚いた。

吸血鬼と人形と色使い（前編）（後書き）

エヴァの性格や言葉使いが違うのは、まだまだ幼いからだと考えてください。

吸血鬼と人形と色使い（後編）

「名前は？」

俺は、目の前の少女に聞く。

「エヴァージェリン？A？K？マクダウエル。

そんじょそこらの吸血鬼とは、一線も二線も格が違う誇り高き悪。

『闇の福音』とは、私のことだ」

えーと……？？

俺の目の前の少女は、さっきまで泣いていた少女で間違いないんだよな？

泣き止んだと思ったら、なんなんだ？この豹変ぶりは。

もつと大人しい感じだと思ったんだけど、今は無い胸を突き出して、私こそが悪の大王だー！！と言わんばかりの勢いで自己紹介をしてくれている。

「驚いて声も出ないか？」

まーそれも仕方ない。なんせ闇の福音を助けてしまったのだからな」

ほんとに……なんなんだ？

「そうだな。ある意味驚いて言葉も出ない。
あと、なんなんだ？その闇の福音ってのは？」

俺がそう言つと少女……エヴァは驚いた顔をして、大きな音を立てて転けた。

ほんとに、いるんだな。こう言う奴。

「ほんとに知らないのか？闇の福音だぞ。
なく子も黙る悪の代名詞の闇の福音だぞ！」

エヴァは勢いよく立ち上がると、顔を真っ赤にして聞いてくる。

「なく子も黙るって……なまはげ？」

「ちっちっち違う。あんなものと一緒にするな」

知ってたんだ。なまはげ。

それはそうと、エヴァは、俺のなまはげ宣言に腹を立てたのか、ポコポコという効果音が似合いそうなパンチを俺の腹に連打してきた。

「あーわかった、わかった。俺が悪かった。だから、殴るのをやめろ」

そういうと、エヴァは、口を膨らませて、渋々……本当に渋々一歩下がった。

「お前は、一体なんなんだ？」

奇妙な魔法は使っし、私のことを知らないし」

エヴァは、ビシッと指をさして聞いてくる。

「いや、いろいろ知らないのは、まだこの世界に来たばかりだから、しかたがない。

そして、俺が使ったのは魔法なんかじゃない。

さっき言っただろ。俺は色使いだ」

間違いは言っていない、急に世界玉に吸われたと思ったら、いかつい農民集団にあつて、手負いの吸血鬼を助けたのだ。こんなハードワークのどこで、この世界を把握する時間があっただらうか？

「なんなのだ？その色使いって言うのは？」

エヴァは、俺の言葉がわからないようで、首をかしげている。

「色って言うのは、人がいう精霊や生命エネルギーいわゆる自然そのものだ。

吸血鬼も幻獣種だから、精霊位は操れるだろ？

木なら茶色。水は青。人は人それぞれ違う色を持っている。

そして、それを操って新たな色を創り出すのが色使いだ」

俺がそう言うと、エヴァは、急にあたふたし始めた。

落ち着きがないな…… . コイツ。

「精霊を操って、新たな精霊を創るなんてできる訳がないだろ！
そんなこと神でもない限り不可能だ」

神じゃなくても、出来るんだがな……

実際、俺は神じゃなくてもただの地球の管理人だし。

「そりゃ俺が神様の代理人だから出来て当然だ。
神様の代理人って言うても、アルバイトみたいなもんだけどな」

エヴァは、今日1番の驚き顔になった。

決めた。こいつの二つ名は「怪人百面相」だ。

「なんだと？私をおちよくるのもいい加減にしろ！！
神の代理人なんぞ、いてたまるか」

「おちよくってなんかいない。
実際、お前の腕も治っただろ」

そうはいったが、エヴァの腕を治したのは、FFの世界の魔法だから別に俺じゃなくても治すことは出来ただろうがな。
しかし、エヴァは自分の腕を凝視すると、幾分か落ち着いてきたように見える。

やはり、この世界では太陽にやられた傷口を治す魔法は珍しいのであろう。

「うーわかった。
特別に認めてやるう。
だが、そのかわり私にもう一度、色使いとやらをみせてみる」

悪戯を思いついた無邪気な顔を見せるエヴァ。
流石にこんな顔を見せられて断れるほど俺もひどくない。

「じゃあ、そうだな。
エヴァ、お前の得物を貸してくれ」

俺がそう言つと、エヴァはウキウキした顔で背中に手を回すと、そこから二等身の体よりも大きい刀を二本持った人形を取りだした。

「チャチャゼロだ。」

私はこいつを糸で操って戦う人形使いの天才なのだ」

殺戮人形か……

どうしたもんかな？

「人形が得物か……」

刀とかなら一振りで大陸が切れる刀とができるんだけどな。

人形か、とりあえず貸してくれ」

エヴァは、俺を疑うそぶりも見せず、これから起きることを期待するかのような瞳を浮かべてチャチャゼロを俺に渡す。

重っ！？エヴァが軽く持ってたからあまくみてたけど、なかなか重いじゃん。

吸血鬼だから力持ちなのか？

俺は、エヴァから受け取ったチャチャゼロを宙に浮かべると、腰から筆を取りだして軽く自分の髪の毛を撫でる。

すると、金色だった髪が、だんだんと薄くなり、白に近い金髪になっていく。

それに比例するかのようには筆は金色の光りを蓄え、俺はその筆でチャチャゼロを軽く撫でた。

エヴァは、その様子を心配そうな瞳で見ている。

「おい。大丈夫なのか？」

髪が白金になっているんだが？」

その言葉に反応するかのようには宙に浮かんでいるチャチャゼロの口が開く。

『ケツケツケツケ、心配スンナヨ、御主人。

旦那ハ、コノクライジャ死ナネエヨ』

その声は、宙に浮かぶチャチャゼロから発せられている。

エヴァは、その声に驚くと俺に向けていた瞳を宙に浮かぶチャチャゼロへと移す。

「チャチャゼロ？」

エヴァが本日2度目の首を傾げて俺をみる。

「武器っぽい武器じゃないからな。」

せつかくだから人形だし、俺の色：生命エネルギーをわけて感情を持たせたんだがダメだったか？」

首を傾げていたエヴァは、俺の言葉に首を横に振る。

「そんなことないぞ。

最高だ最高！チャチャゼロが喋るなんて夢見たいだぞ」

エヴァは、その体躯にみあった純粹な笑顔を宙に浮かぶチャチャゼロへと向けて、その場で飛び跳ねている。

「だとよ、チャチャゼロ」

「ケツケツ、ソソジャ改メテヨロシクナ、御主人」

そう言う、チャチャゼロをエヴァが見つめると、今まで苦楽をともにしたパートナーに向けて、エヴァは、言葉を口にする。

「こちらこそ、よろしくなチャチャゼロ」

こうして、孤独だった吸血鬼と感情を持った人形は本当の意味で出会った。

吸血鬼と人形と色使い（後編）（後書き）

長くなりそうなのでここで一旦切ります。

次回で、過去編が終わる予定で、その次からは原作の時代にいきます。

グダグダなってきたる気がするので、気合を入れて書きます。

神と竜と色使い（前書き）

神と竜と色使い

「そついやー自己紹介がまだだったな。

俺の名前は 鳴神 色。

とりあえず、神のバイトで地球の管理人をしている」

かなり昔に建てられたのか、ところどころ壁に穴や隙間がある教会。俺とエヴァは、教会の中央に位置する赤いカーペットの上に向き合うようにして今後のどうするかについて話し合っていた。

「地球の管理人だの、神のアルバイトだの、力を見せられなくては信用も出来ないものだな」

俺の正面にあぐらに座っているエヴァが、ほうづえをつきながら言う。

エヴァが言うように今まで、この自己紹介をして、「そつなんですか。地球の管理人さんなんですね」とか言って納得してくれた人は、片手で足りる程度しかない。

人間の身でありながら、悪魔を愛したソロモン王とか、度が抜けた天然さんくらいなのだ。

だから、この反応に慣れたつもりでいたのだが、嘘を言ってないのにあんな瞳を向けられるなんて、流星につらいものがある。

自己紹介かえよっかなー……

「ケケツ、御主人。旦那二八常識ナンテ意味ナインダヨ」

そう言っているのは、さっき感情を宿らせた殺戮人形のチャチャゼ口。

こんな性格にした覚えはないのだが、気づいたら殺戮人形にぴったりの口の悪さになっていて正直、後悔している自分がいる。とにかくだ、これからどうするかを考えなくてはならない。

「エヴァ、お前はこれからどうする?」

エヴァは、しばらく考えるとチャチャゼロを見て口を開く。

「復讐は終わった。」

正直私には、したい事もしなければならない事もない。だから、これから世界を改めてまわってみる。

チャチャゼロに世界でもみせてやるよ。

お前はどつするのだ?シキ」

そついうエヴァの顔は、思い何かが吹っ切れたような、清々しい顔だ。

横ではチャチャゼロが「ヤサシイ御主人ダナ。ケケツ」とおちよくっている。

「俺か？俺はだな」『はいはい、その質問は妾が答えてやるぞよ』

俺が答えようとしたその時、突然視界が歪むと俺の膝の上に蒼いドレスを身に纏った、蒼い髪と蒼い瞳を持つ少女が現れた。

「ミツミラ！？」

ミラは、俺の顔を見るとなんの前触れも無しに飛ぶようにして抱きついてきた。

ちなみにエヴァは、驚いているのか固まって動く気配がない。

「シキー会いたかったぞよ。」

お主が消えてから、はや5時間。妾は寂しかったぞ」

消えたって、消したのはお前だろ！！

ってか、まだ5時間しかたってねえのかよ！？

「どうしたんだ？お前が一体こん」『だっだっだ、誰だ貴様は？突然現れおって！』

あー、さっきから最後まで話しきれねえ。

だんだんイライラしてきたぞ、この野郎……
そんな、俺の事に構わずエヴァにとっては突然現れて俺に抱きついてきたミラが気になるようだ。

「そんな大声で怒鳴るな。

耳に響くであろうにー、して、なんじゃ金髪幼女よ」

ミラは、抱きついたらままの状態で顔だけエヴァに向ける。

心なしかその顔がニヤついたように見えるのは、俺の気のせいなのかミラ。

「っな！？だつ誰が、金髪幼女だ！！」

ニヤつくミラと反比例するかのように、顔を真っ赤にしてエヴァの勢いよく立ち上がる。
なんか、めんどくさくなってきたな。

「妾から見れば、お主なんぞ幼女で赤子じゃ。

だから、そんなにいきりたつでない。はしたなかるうに」

ミラは、そんなエヴァの態度を楽しむかのように挑発する。
しかし、ミラにそんな気はなく、自然にこうなるのだからたちが悪い。

「なつなにうお、ちょっとタンマ、落ち着け」

俺は、ミラの言葉に反論しようとするエヴァの頭を片手で抑えながら話をさえぎった。
さっきのお返した。

「イガイト、チッセエーナ旦那」

うるせー。

「まー待てエヴァ。

怒りたいのはわかるが、一旦落ち着け。

そして、ミラ。お前もいい加減膝から降りてくれ」

エヴァの頭、あやすように撫でるとエヴァは、どうにか大人しくなった。

そして、駄々をこねるミラだが耳元で「あとでなんでも言う事を聞いてやる」というと、シュタツという音とともにエヴァの横になった。

あーミラに言ったが、もう後悔している。
まじでこええー。

「まずだな、エヴァ。

こいつは、ミラ。俗にいう神様だ。
だから、こいつから見れば俺たちは赤子同然だ」

エヴァは、もう見なれた驚き顔を浮かべ横にいるミラを見る。
そして、ミラ。にやにやするな！！別に褒めてなんかいいえ。

「本当なのか？シキ？
こんな奴が、こんなのが神様なのか？」

エヴァは、まるで俺に違うと言ってくれと、いわんばかりの視線を送ってくるが、残念な事にそいつが神様である事は疑い用のない事実なのだ。

「なんじゃ？信じないのか？ならば、証拠をみせてやろう」

そういうと、ミラは片手を天に向けて突き出した。
ヤバイ……あの構えは……

「やめるミラ！！地球を壊すきか！？」

「なァーに、気にするな。
ちよっとイギリスがこの教会以外、地図から消えるだけじゃ」

ちよつとじゃねえー！！

そして、それを聞いたエヴァは、急に冷や汗をだらだらと流して壊れた人形のように首をカタカタ向けてきた。

それに対して俺は、残念ながら本当だという意をこめてうなづいく。

「ケケツ、コリヤア傑作ダゼ」

おい、チャチャゼロ。どこぞの零崎みたいな事いうな。殺して解して並べて揃えて晒してやんぞ。

とにかく、俺の慌てっぷりに危機感を感じたのかエヴァもミラを止めることに協力することにしたみたいだった。

「やめるミラ！こんな事をするために来たんじゃないんだろ？」

そう言つとミラは名残落ちそうに片手を下に下ろした。

「なんじゃ、つまらんの」

そう言つとミラを見てひとまず、エヴァと俺は肩の力を抜いた。

本当に心臓に悪い神様だ。

「ケケツ、ンデ神様ヨー何ノ用ガアツテキタンダ？」

珍しくチャチャゼロがまともな事を言ったな。

それに対してミラは、待ってましたといわんばかりの笑顔を浮かべる。

「そうじゃったな。

お主ら、これからの事に対して考えておったじゃろ？

だから、妾も提案しようと思ったのじゃ。よいな？

まず、シキじゃがこれから500年後の日本の麻帆良に妾が轉移させる。

このまま、この時代にいてもらっても構わんのじゃが、パワーバランスが崩れてしまうのでつまらなくて仕方がないのじゃよ。

だから妾のために飛んでもれ、シキ」

OK I See

このミラ姫は、この時代じゃつままないから、轉移しろってことか。わかってるわかってるんだ。

どうせ俺に拒否権なんてないんだろ。

「わかった。

でもミラ、チョットだけこの時代に心残りがあるんだけど」

今、俺の顔には悪魔も凍りつくような笑顔がうつってるんだろつな。目の前のエヴァが、ぶるぶると体を震わせながらこっちをみている。そして、ミラは俺の思惑に気づいてるのか笑顔を見せる。

「なんじゃ？申してみよ」

「なあーに、たいした事じゃない。
エヴァの腕をもぎとって、あやまりもしない奴らにお仕置きするだけだ」

そう言いながら、俺はエヴァを見つめる。
エヴァは、今日何度目か数えるのも面倒になってきた驚き顔になる。
そして、ミラはというと

「そつじゃな、あやつ等には神の鉄槌を下してやるつぞ」

くそして夜く

俺は森中の色を震わせる。

すると、木はざわめき。川は荒れ狂い。動物たちは鳴き叫ぶ。その中央の開けた場所にいる20人程の男たちは、そんな森の変化に怯えを隠せないでいた。

そしてそれを起こした本人である俺は……

「いいか？ 作戦通りやるんだぞ。

エヴァ、お前は何にもするなただ立つとけばいいからな。

ミラは声担当だ。

タイミングに合わせて俺がバハムートを出す。

チャチャゼロは、俺の頭の上にも乗ってる。

そんじやいつちよパーティーの始まりだ！」

森の中でも見晴らしのいい草原に、男達はテントを張っていた。

男達は農具で武装していて、あたりを警戒している。

突然、森がざわめきだしたのだ。

そこに声が響いてきた。

『私が何をしたのだ？』

男達は、その声の主を探そうとあたりを見まわすが影すら見当たらない。

更に、声は続く。

『あの男は、こそが悪だったのに』

1人の男が悲鳴をあげた。

男達のテントが燃えさかりなかに女の人影が現れたのだ。

『なぜ、お前達は私を追う？私の腕を奪った？』

燃え盛る炎の中から、幻術で大人の姿をしたエヴァが一步一步と男達へと踏み出して行く。

『許せない……許せない……』

恐怖に耐えられなくなった男達。

ある者は、恐怖により身がすくみ動けず。

ある者は、震えながら農具を構え。

ある者は、逃げ出そうと農具を捨て逃げ出そうとするが、時すでに遅く。

『今こそ我が憎しみをここに。』

我が憎しみの化身よここに出でよ』

すると、地面が揺れ。雷鳴が轟き。空が割る。

その割れ目からは、鋼鉄で体を纏った巨大な竜が現れた。

『……………行け』

竜は、この森の空地を全て飲み込むかのように息を貯める。

そして一瞬の静寂の次の瞬間。

その咆哮から禍々しい黒色の炎が男達を襲った。

かのように見えたが男達に当たりかけた、その瞬間に炎は虚空に消え去りそれとともに龍も消え去った。

「見ておったか！傑作じゃな此奴らの顔！」

茂みの中に隠れていた俺たちは、男達が皆気絶しているのを確かめるとエヴァのもとへ集まった。

「なんなのだシキ。今の竜は？」

聞かされてはいたが、あれ程とは思はなかったぞ」

そりゃそうだ。

俺も初めて見た時は驚いたからな。

「ケケツ、旦那モ人ガ悪イナ」

「うるせー、お前が言うな。」

お前、あの時ひとりだけ大爆笑してただろうが」

俺は頭の上のチャチャゼロをコツンと殴る。

「まーとにかく、妾は楽しかったぞ」

ミラは、いい暇つぶしじゃ、と騒いでいる。

そして、俺はエヴァに視線を向け、頭の上のチャチャゼロをエヴァに差し出す。

「じゃあ、これでお別れだ。」

また500年後どこか出会えたらいいな」

俺がそう言つとエヴァは、目に涙をうかべている。
そして、その口を開いた。

「必ずだ。また必ず。
お前を見つげ出してやる」

エヴァが、そう言つと俺の体が光に包まれてだんだんと意識が薄ら
いで行く。
それでも、俺も必死に口を動かす。

「待つてる……また……な」

強い光に覆われて俺の存在は500年後に飛ばされた。
その光が強くなる瞬間にエヴァの声が聞こえてきかした。

『ありがとう』と。

神と竜と色使い（後書き）

なんか変な感じになりましたが。

次からは学園編です。

やっと書きたかったところに辿り付きました。

あと、アンケートをしたいのですが

シキのパートナーを決めて欲しいのです。

是非是非、感想、又はメールボックスまでよろしくお願いします。

髭と眼鏡と色使い（前書き）

ようやく本編です。
がんばります。

髭と眼鏡と色使い

目が覚めると、そこは森でした。

「またかいな!？」

なんだ?ミラのやつ。このパターンがお気に入りなのか? 愚痴をはきながらも、例のごとくあたりをみまわす。

刹那。

『きええー!!』

突然、背後から片手に棍棒を携えて俺に狙いを定めた2m程の人外の鬼が襲ってきた。

体が大きいためか、それほど早くない人外にたいして俺は、後ろに振り返ると同時に背面へと振り上げた右足を人外の腹へとめりこませた。

いわゆる、回し蹴りだ。

思いの外あたりどころが良かったのか、それとも相手が弱いだけなのか人外はその一撃によって呆気なく地面へとひれ伏す。

「なんだこいつは?」

おだやかではないな。

とにかく、ここにいてもしかたない。

この人外の正体でも暴かない事には物語はすすまねえな。

そう考えると、俺は人外がやってきたと思われる方へと足を進めた。

ここは、麻帆良学園と呼ばれる巨大な学園都市に程遠くない山。そこに、異形の人外と争っている頭が特徴的な着物の姿の老人と、無精髭をはやした白いスーツ姿の男がいた。

「それにしても、今日はいつになく鬼達の数が多いですね。やはり、関西呪術協会に情報が漏れていたのでしょうか？」

スーツ姿の男は、拳をポケットに入れたままという特異な態勢で人外と向き合う。

「ふおっふおっふお。

やはり、急に義息子に会いに行くのはまずかったかのお。

まさか、こんなに警戒されるとは」

着物の姿の老人が言う先には人外達の集団がいる。その数、200〜300といったところだろうか。そのほとんどが大小の違いはあれど鬼の姿をした者だが。中には、辺りの距離も大きな体を持つ巨人。

そらを舞い、槍を携えているカラス天狗と呼ばれるものなど様々な人外が入り乱れるように存在している。

「刹那君と龍宮君たちは大丈夫でしょうか？」

「なあに、心配ない。彼女らは己の力量をわきまえて居るよ。

それよりタカミチ君。今は、他の心配をする余裕なんてなかるう」

「そうですね」

タカミチとよばれた男は前を見据えると、ポケットに入れていた拳をわずかに動かす。

すると、前にいた人外がなにかにぶつかつたかのように勢い良く大きな太い木へと、吹き飛ばされていき、始めから何もいなかったかのように消えて無くなった。

「とは言つても、この数じゃ、僕の居合い拳だけでは時間がかかりそうですね」

男が放つ正体不明の攻撃の名は 居合い拳 というみたいだ。

「そうじゃな。

よしここは久々にわしも一つ頑張るかの」

なにかをしようとしたのか、着物の老人が身の丈ほどの杖を掲げようとした、その時。

『俺に任せなよ』

俺は、タカミチとよばれる男と人外達とのちょうど間で筆を構えた。

突然、現れた俺のせいで崩れだした拮抗。
それを最初に支配しようとしたのは、一際でかい人外であった。

「何者だ？貴様は？」

またその質問か。と俺はこころの中で愚痴をこぼす。
しかし、答えない事には物語は進みそうにない。

「ただの色使いだ。それ以上でもそれ以外でもない。
そして今度は、こっちからの質問だ。
なんで、たった2人をこんな大勢で襲ってるんだ？」

俺は、覇気を感じられない人外の瞳を見つめながら言葉を紡いだ。

「術者には逆らえない。そして、俺は血が見たいんだよ」

そう言うと人外は、ゲラゲラと笑い出す。

「腐ってんなお前」

「なんとも言え。俺は契約のために生きてるんだよ」

俺は、目の前のこいつが敵である事を認識する。

すると、後ろから着物姿の老人が話しかけてきた。

「助けてくれるのはありがたいがの、ちと数が多すぎやせんか？」

「大丈夫だ。……ひとつ質問させてくれ。あんた達は どうしてあいつらに襲われてんだ？」

俺は化け物から目をそらさず言葉を返す。

「ふむ……大雑把に言つと、こやつらは術によって召喚された人外。わしらは、敵の大将さんと話の場をもうけたいんじやが、下の物達 がなかなかわしらを避けてるようでの」

「が、学園長？」

「大丈夫だタカミチ君。どうやら彼は敵ではないらしい」

タカミチ、という名前だろうか、眼鏡をかけた男の人は少し驚いていたが、すぐに相手に目を向ける。

「ふう。すまない。助力感謝するよ」

「気にするな。それじゃ、いっちょパーティーの始まりだ」

俺は構えていた筆で虚空を切り裂く。

こんだけの数だ、派手に暴れても良いだろうと。

俺はそう考えると、切り裂かれた空間から黒のピンを4つ取り出した。

そして、取り出されたピンから黒の光が宙へと舞う。

それらを互いが強くなるように一色また一色と重ねて行くとそこに

は、純粹なる漆黒が現れた。
その漆黒を紡ぐ魔法陣を空中をキャンパスに見立てて描く。

「黒の4重色に溺れる 断罪の重力 グラビガ」

「タカミチ！下がれ」

前線で戦っていたタカミチとよばれる男に指示をだすと、男も異変を感じたのか即座に俺の横へとバックステップでやって来た。

タカミチが俺の横へとやってきた、その瞬間。

山全体が唸りをあげ、木々と人外がまるで大気に押しつぶされるかのようにして、めきめきと音を立てて山自体が深く深く潰されて行く。

「なんて威力じゃ……………」

呆然とする老人とタカミチ。

その瞳の先には人外はおるか、山さえもなかった。

さっきまで山があった場所は、その面影もなく、そこには少しくぼみのある更地だけが残っていた。

やばい、完全にやりすぎた。

「君はいつたい、なんなんだい？」

タカミチとよばれる男は、拳をポケットに入れた態勢を崩さずに聞いてくる。

「えーと、名前は鳴神 色。職業は色使いだ。

山を崩してしまったのは本当に悪いと思ってる。

なをなら今から直すけど、どうする?」

自己紹介を変えてみた。

すると、タカミチの後ろにいた老人が前に出てきた。

「なんと?これを元通りにできるのかね?」

「元通りと言われると語弊があるが、山の形にする位ならできる。ちよつと後ろに下がつとけよ」

俺はそう言つと、筆を高くあげる。

てか、さっきからタカミチさん。

その尋常じゃない程の殺気やめてくれないかな?

その殺気は、とりあえず無視するとして、俺は森の色……精霊達に呼びかける。

土に潜む者には形を。

水に潜む者には流れを。

木に潜む者には命を。

そして、俺はイメージを胸に筆で山を描いた。

すると、山が轟々と音を立てて、窪んでいた大地が盛り上がり、それと共に木々が命を振り返り返して行く。

そして音が収まる頃には、更地は山と呼べる者へと変貌していた。

「本当にすごいのお。まるで神の奇跡じゃな」

老人は、パチパチと乾いた拍手を俺に向ける。

そして、なんだかタカミチさん殺気がなんだか強くなってきたがします。

「それにしても、お見事じゃった。助力感謝するぞ。

つと、ワシは自己紹介がまだだったの。わしの名は近衛近右衛門。共に戦っていたのがタカミチ・Ｔ・高畑君じゃ」

？

「高畑・Ｔ・タカミチだ、よろしく鳴神君」

タカミチさん、笑顔で殺気はやめてください。
ちよー怖いです。

「鳴神色だ。よろしく、タカミチさん」

？

「タカミチでいいよ。鳴神君」

？

俺はこれ以上、悪印象を与えないように満面の笑みでお互い握手をした。

そして、握手が終わると近衛の爺さんが口を開いた。

「ところで、鳴神君。

感謝の意も込めて御礼をしたいのだが、麻帆良と一緒に来てくれな
いかのお？」

これからやることもないし、とにかく今はタカミチさんから離れた
い。

状況を打破しなくては。

「いいですよ。それじゃ案内よろしく」

そしてシキは、ミラの手のひらの上で踊る。

髭と眼鏡と色使い（後書き）

ヤバイ、タカミチがキャラこわれたかも。

グラビガ

FFより 範囲型の黒魔法

重力による攻撃

まだまだ募集中のアンケートです。

シキのパートナーを決めて欲しいのです。

是非是非、感想、又はメールボックスまでよろしくお願いします。
（現在）

・あきら ・楓 ・サジ ・のどか ・刹那

・このか

がともに一票ずつです。

麻帆良と色使い（前書き）

作者が暴れ出しました。

麻帆良と色使い

（麻帆良学園・理事長室）

「それでは改めて自己紹介しようかの。ワシの名は近衛近右衛門。私立麻帆良学園の理事長と、関東魔法協会の理事も兼任してある」

大きな机を挟んで、俺はおひげの立派な近衛の爺さんと向き合っている。

もちろん、異常殺気発生器ことタカミチさんも当然のごとく、まるで傭兵のように部屋の一角にいらっしやいます。

にしても近衛の爺さん、理事長やらなかなかの肩書きの爺さんだな。

「なら、俺も改めて。名前は、鳴神色。色使いだ。

近衛の爺さんみたいに、立派な肩書きもないし。

ついでに言えば、今は住む家もなければ仕事もない」

そう言うと近衛の爺さんは、指を顎に添えて首を傾げる。

「鳴神君。質問なんじゃが色使いとはなんなのかね？」

我々が使う魔法使いだと思っただけなのかなの？」

俺に向ける瞳には、疑心の念がこもっているように見える。

人は未知を恐れるのだから、それも仕方ないだろう。

でも、タカミチさんは自重しなさい。

「そつちの魔法の仕組みがわからないから、なんとも言えないが。俺が言う色使いってのは、人にわかりやすく言うところ『精霊使い』『自然操作』みたいなもんだ。」

これには、大きくわけて2種類の力がある。

例えばさっき山を戻した時みたいに、その場にいる土や木や水の精霊を操るタイプ？

もうひとつは山を潰した時みたいに、ストックしている色……つまり、精霊達を筆を媒介にして、複数の精霊を練り合わせ属性を創り出し、魔法陣で術式を組み上げて行くタイプの二つだな。

基本的に、少量の色を扱う程度なら筆じゃなくて指でも代用できる。他にできることと言えば、自然や人、動物から色……この場合は生命エネルギーを強制的に吸い取るエナジードレイン。

もちろん、逆に与えることもできる。

それを、応用すれば自身の身体能力の増加、属性の寄付、最終的には自分自身を精霊化することをできる。

簡単に説明するとこんなところだな」

ああー、めんどくさいな。

でもここで、説明しなかったらタカミチさんが出力上げそうだったからな。

多分、常人だったら耐えきれずに胃に穴が空くどころか、蜂の巣状態だろうな。

ともかく、嘘はついていないので大丈夫だろう。

そして、近衛の爺さんかというと、目を見開いております。

「なんて出鱈目なちからなんじゃ。」

実際に見ておらんかったら、信じれない話じゃな」

デジャブ？

このセリフ、つい最近聞いた気がするんだけど……

「ともかくじゃ。」

わしらの使う魔法とは、似て非なる者といったところかの。

わしらの扱う魔法とは、己の魔力を使って精霊の力を借りると言った感じじゃな」

つまり、色使いの劣化板ってとこだな。

魔力をエサに精霊を操る方法が、この世界での魔法か……

これなら会得しやすそうだな。

「さっきお礼してくれるっていつてたよな？」

それなんだが、この世界の魔導書を何冊かほしいんだけど。

ダメか？」

その言葉に近衛の爺さんは困ったように首をひねり。

タカミチさんの眉間にはシワがよっております。

「魔導書をおいそれと貸すわけにはいかんのじゃよ。

しかし、鳴神君。

あれだけの力を使えるのにどうして魔導書がいるのかえ？

この世界のという言葉もなんかひっかかるぞ？」

したたかに見えて、抑えるところは抑えてんだな。

しかたない。

ーから話すしかないか。

「……………ということなんだ」

「つまり、鳴神君はFFと呼ばれる世界から迷い込んでしまい、偶々わしらと遭遇したというわけか」

はい。嘘をつきました。

だって、言えるわけがないだろう!?

「神様の暇つぶしでこの世界を荒らしにきたのだー」とか言えねえよ。

だから今俺は、FFの世界の魔導師で修行中に突然意識を失ったらここにいたという設定にしている。

「信じてくれるのか?」

？

「まあ……先ほどの鬼達も大雑把に言えば異世界から呼ばれた奴らじゃしの。」

驚きはするが予想外ではないぞ？

それと……どうじゃね？そちらの世界とこちらの世界の相違点は？」

意外と柔軟に対応してくれたな。

魔法の国の住人だからということあるんだろうな。

「パツと見だが、特にないだろうな。」

ただ、近衛の爺さんの口調からじゃ、この世界では魔法は隠匿情報みたいだが？」

「そうじゃな。できれば混乱を避けるためにも、鳴神君も控えてくれんかのぉ」

これ以上、タカミチさんみたいなのが増えても嫌だしな。

と言っても、俺自身が魔法の固まりみたいなのところがあるんだが……

「して、鳴神君。君はこの後どうするつもりかね？」

？

「どうするとは？」

？

「君は異世界から来たのじゃろ？」

なら戸籍やら食料の調達やら、生活に必要なものが色々あるじゃろうに」

？

「あ……」

？

いわれて気がついた。

確かに生きていくうえで必要な食べ物を作るにしても、現代においては何事もお金が必要だ。

バイトをして稼ぐにしても戸籍が必要。

俺ができるのは戦闘関連プラス家事くらいのものである。？そこまで深く考えてなかったからな。

「そこでじゃ、今ワシの学校に魔法使い見習いの先生が来る予定だったのじゃがな、彼が若すぎるといっつか幼すぎるといっ事、教育委員会からNGが出てしまったのお。」

先生になってくれる人を探していたのじゃが、どうだね鳴神君？

先生になってくれやしないかの？

もちろん、給料も住処もこちらで準備させて貰おう」

近衛の爺さんが、そう言ったとたんに、動かずに様子をみていたタカミチが慌てた様子で口を開いた。

「学園長！」

ちよー怖え。

覇気っていうか、怒気っていうか、殺気っていうか、気がすげえー体からほとばしってるんですけど。

だが近衛の爺さんは、そんなタカミチさんの気を涼しい顔で受け流す。

「タカミチ君。」

確かに君が鳴神くんの事を用心するのもわかる。

しかし、彼は強大な力を持っているがむしろに敵意を示してはないじゃろうに。

彼のことを知ろうとしないで、殺気を当てるのは関心せんぞ。

問題なのは、力をどのように使うかのじゃよ」

「しっしかし」

すると近衛の爺さんは、タカミチさんを手招きして耳元で囁いた。

（彼を雇うのは彼を野放しにしないためじゃ。

もし彼が、関西呪術協会に協力したらひとたまりもないのだぞ）

（……………わかりました。しかし、彼の監視は私に任せてください）

（もちろんじゃとも。

彼ほどの実力者と渡り合えるのは君くらいじゃからな）

2人は、お互いに向き合ってうなづいた。

そして、俺の方に顔を向ける。

「いやー、ごめんね。鳴神君。

職病みたいなもんでさ、つい警戒しちゃったんだよ。

君みたいな人が、危険じゃないことなんか一目でわかるのにな。

あと、先生の件だけど、僕からもお勧めするよ」

ちよー怖え。

タカミチさん笑顔なんですけど、メチャクチャ笑顔なんですけど。

近衛の爺さんに何を吹き込まれたんですか？

「そうだな……………」

確かにいい条件だよな。

ミラの依頼を遂行するためにも、この世界で生きていくためにも、お金はあるし。

近衛の爺さんも、なかなかのお偉いさんみたいだから、情報も集まりやすいだろうしな。

「先生になってくれるのなら、東洋一の魔導書の宝庫と呼ばれる図書館島への出入りも許可するぞ」

悪くないどころか、最高じゃねえか。

「わかった。引き受けよう。」

だが、俺はあいにく教員免許を持ってないんだが」

「それなら心配無用じゃよ。」

鳴神君に担当してもらうのは、英語なんじゃから。

鳴神君は、その髪といい海外の生まれじゃろ？」

近衛の爺さんが、ウキウキしたようすで聞いてくる。

確かに、人の言語なら一通り網羅しているから問題はないが…

「イギリスにいたことは、昔ある」

500年前だがな。

「なら問題はなしじゃ。それでは、鳴神君。」

君には、21Aの3ヶ月間のお試し担任、および女子中学生寮の管理人兼警護。

緊急時による、学園の警備をお願いする」

「ちよつと待て！なんだ？女子中学生寮の管理人って？」

勢いで聞きのがしかけただろうが！

「それはの、前の管理人さんがやめてしまったのじゃが、流石に女子寮に子供だけだと危ないじゃろ？」

そこで、鳴神君に管理人兼警護をして貰おうと思ったのじゃよ。君の実力なら、たやすいことじゃろっ？」

ニシシシという音が似合いそつな顔を浮かべている近衛の爺さん。

「なんで、俺がやんなきゃならねえんだ？」

「そりゃもちろん、鳴神君に管理人兼警護として女子寮に住んでもらうからじゃよ。」

当然のことじゃろっ？」

なんだそりゃ？

俺は構わないが、女子寮の子達がいやがるだろ。

「そついうことじゃから、よろしくの。」

断るのなら、図書館島の件は無しって方向での」

卑怯だぞ。

この妖怪爺さんが！！

「よいな？」

「……………あー、わかったよ」

こうして、俺の波乱の学園生活が始まるうとしていった。

麻帆良と色使い（後書き）

すみません。

主人公いきなりきえちゃいました。

あと、まだまだアンケートしています。

シキのパートナーは誰がいい？……です。

どしどし応募ください。

そして、今後の展開に案があれば感想まで。

双子と色使い（前書き）

アンケートに御協力ありがとうございます。

おかげで、だんだん形ができてきました。

作者の野望としましては、原作が終了するストーリーまで連載する予定です。

長い付き合いをよろしくお願いします。

あと最近、大学入試で忙しいので更新が遅くなりそうですが、

一日一更新を目指してがんばります。

双子と色使い

「それじゃあ、早速、女子寮へと行ってもらおうかのお。
タカミチ君。鳴神君を寮まで案内してくれんかいのお？」

「っな！？なんですと！！」

「いやいやいや！！大丈夫！！おれ一人で大丈夫だから。
ほら、せつかくだし、学園とかみてまわりたいしさ」

「とんでもない。」

「これ以上、俺がタカミチさんと一緒に？」

「しかも2人つきりだって？」

「そんなこと、たとえ神が……いや、もとい、ミラが許したとしても
断固拒否してくれようぞ。」

「そう思いながらも、チラツと未だに立ったままのタカミチさんの方
をみる。」

「ちよー怖え。」

「そんな俺の心を知ってか知らずか、未だにニコニコと笑ってらっし
やいます。」

「あの笑顔が悪魔に見える俺は駄目人間なんでしょうか。」

「そうじゃな。」

これから暮らしてもらおう土地じゃし、早く慣れんと辛いじゃる。では、これが目的地までの地図じゃ。

この学園都市は、かなり広いから道に迷わないように気をつけるんじゃよ。

それと、これもあげよう」

どうにかタカミチフラグは、折れたみたいだな。

そして、俺は近衛の爺さんから寮までの地図と『基本魔術書』と書かれた本を受け取った。

「おい、近衛の爺さん。これは？」

「ふおつふおつふおふお。

それは、『基本魔術書』その名の通り、こちらの魔法使いが使っている基本的な魔法が、戦闘クラスから日常クラスまで幅広く載っている魔術書じゃ。

さっき助けてもらった、お礼として受け取ってくれんかのお」

この爺さん、憎いことしやがるな。

「ああ、貰つといてやる。サンキューな。

それじゃあ、行ってくる」

別れを言ったその時、近衛の爺さんが思い出したように俺を呼び止めた。

「そつじゃ。

いい忘れておつたが明日は、3学期の始業式があるから、ここに6時に来てくれんかのお？」

「おー。りょーかい」

そうして、今度こそ扉を開けて外へと出て行った。

にしても、広すぎじゃねえか？

たかが学園都市と侮っていたが、これがかなりのもんで学園自体が大きいのは当然ながら、その周りにある店や設備なども充実している。

今までみた中でもかなりのトップクラスに食い込む程の都市だな。そして、今俺は学園を抜けて少し歩いた、麻帆良ストリートと書かれた、お洒落な雑貨屋や小物屋や洋服屋などが、たちならぶ道をぶらぶらと歩いている。

いや、平和だな。

まさか、こんないいところに住めるなんてな。

『……………じゃねえぞ！このガキが！？』

ん???今なんか聞こえて来たような……

『おい！黙ってんじゃねえぞこらあー!!』

確実に聞こえた。

ここからすぐ近くの雑貨屋の近くの細い路地からガラの悪い男の
声が聞こえる。

『おい！なんか言ったらどうなんだよ！殺すぞ、こらあ!?!』

つたく。

俺の平和をぶち壊してくれてんじゃねえぞ。

俺が人さし指を立てると、空气中を漂う風の精霊が俺の体を纏う。

そして、そのまま声の聞こえる方まで走って行くが、その速さは、
もはや人のそれを超えていた。

まさに、文字通り風のように駆けたのだ。

こんにちは、史伽です。

今日は冬休み最後という事で、お姉ちゃんと一緒に麻帆良ストリートにある雑貨屋さんに来ています。

それにしても、可愛いものばかりで困りますう。

「ねえー史伽あ。どっちがいいかな？」

クジラのぬいぐるみとキツネのぬいぐるみを両手に抱えて迷っている、私にとっても似た少女。

それが、お姉ちゃんの風香です。

ここ麻帆良では、さんぽ部としていろんなところに行ってるので私達はなかなか名の知れた双子なのです。

「んー。そのキツネのぬいぐるみが、お姉ちゃんに似合ってるよ」

「そう!?!じゃ買ってくる」

そう言つとお姉ちゃんは、一目散にレジへと走って行きました。

お姉ちゃんは、いつも元気すぎます。

「私は、これにしようかな」

私もお姉ちゃんに遅れないように、ぬいぐるみを手にとってレジへ向います。

カラン カラン

『ありがとうございましたー』

「ねえ史伽は、なに買ったの？」

店を出ると、お姉ちゃんは早速さっき買ったばかりのキツネのぬいぐるみを袋から取り出して、両手で大事そうに抱えながら聞いて来ました。

私が買ったのはネコのぬいぐるみです。

それをお姉ちゃんに見せてあげようと、袋を開けようとした時。

「いつてえな！おいガキ！なに道の真ん中で立ち止まってんだよ！？」

「じつごめんなさい」

突然、怖そうな男の人が背中にぶつかって来て私は前に倒れてしまいました。

謝ったのに、男の人はまだ怒ってるみたいです。

「ごめんですんだら、警察はいらねえだろうがよ」

怖いです。

お姉ちゃんを見ても私と同じでなにも言えずに固まっています。

困った事にここは、細い路地なので誰も気づいてくれそうにありません。

「なめてんじゃねえぞ！！このガキが！？」

「……………」

怖いです。

私もお姉ちゃんも怖くて喋れません。

「おい！黙ってんじゃねえぞこらあ！！」

「……………」

だれか、助けてください。

「なんか言ったらどうなんだよ！殺すぞ、こらあ！？」

男の人は、喋らない私とお姉ちゃんを見て怒ったのか、私を叩こうと手をあげて振り落として来ました。

怖くて目をつぶった瞬間、すごい風が吹いたけど、いつになっても叩かれないし、体のどこも痛くありません。

私は怖かったけど、つぶっていた目をゆっくりと開いたら、そこには、さっきまでいなかった薄い金色の髪で背の高いカッコいい男の人が私を庇うようにして、怖い男の人の拳を片手でつかんでいたのです。

「なにがあつたかしらねえが。こんな子供を殴っちゃダメだろ？」

シキside

「なにがあつたかしらねえが。こんな子供を殴っちゃダメだろ？」

俺は、風の精霊で強化した身体能力で、どうにかギリギリのタイミングで男の人の拳をつかむ事に成功した。

男は、突然現れた俺をみて、まるで信じられないようなものを見たかのような顔を浮かべる。

「なっ?? 誰だお前? 俺様がだれだか、わっ……………クッ」

「ん? なんか言ったか?

って言ってもう聞こえねえか」

あまりにも男がつまらないから、俺は一瞬で男の後ろに回り込むと同時に首に軽くチョップしたら、男は糸の切れた操り人形のように前に倒れた。

そして、まだ呆然としている2人の少女を見る。

「とにかく、ここにいたら面倒だから離れるぞ」

「はっはい」

俺は、その場を離れるために2人の少女の腕をつかんで走った。

そして、ここは馬鹿でかい木の下にあるベンチ。

「なるほどね。それは男が悪いな」

「あの、ありがとうございますあ」

おとなしそうな方の双子の1人が俺に頭を下げる。

そして、もう1人はなぜか俺の頭の上に乗った状態で俺の髪の毛をいじっている。

「めちゃくちゃ強かったな！！何者なんだ？もしかして忍の者なのか？」

「もういいから頭あげな」

そして、俺は鳴神色だ。忍者でもなんでもない」

「なんだー違うのか。ちなみに僕の名前は鳴滝風香だよ。お姉ちゃんのほうね」

すると、頭を下げていた子が慌てて頭をあげた。

「あっ！！私は鳴滝史伽ですう」

どうして、双子でこつも違うかね？

かたや礼儀正しくて、かたや懐かれたのか頭の上に乗ってるし……

とにかくだ、ここまで来ても男は追いかけてこないんだし、もう大丈夫だな。

「そんじゃ、俺もう行くから。そして、お前は頭から降りろ」

そう言ってベンチから立ち上がったら、史伽のほうが俺の腕をつかんで来た。

そして、まだ風香は俺の上にいる。

「待つてください、シキさん。」

助けてもらったので、なんかお礼させてください」

「別にお礼して欲しくてやった訳じゃねえから、いいよ」

そう言うと、風香が俺の髪の毛を引っ張り始めた。

「そうそう。遠慮しないで僕達もシキ兄のために頑張るよ」

風香は、そう言いながらまた髪の毛で遊び始めた。
おそらくコイツは、俺の頭から降りる気はないようだ。
しかもこれ以上、髪の毛で遊ばれたら禿げてしまつ。

「あーわかつたよ。」

じゃあ、ここまで案内してくれねえか？

まだここに来たばかりで道がわからねえんだよ」

そう言いながら、胸ポケットから近衛の爺さんに貰った地図を頭の上にいる風香へとわたした。

「いいよーまかせなさい。ってここ僕達の寮だよ!？」

「そうか。なら案内よろしく」

「まかせなさい。それじゃ史伽よろしく」

おい！？風香。

お前には降りるといふ選択はないのか？

そして史伽は、なんでまだ手をつないだままなのですか？

「じゃあ、シキさん。ついて来てください」

そうして俺は、頭の上にいる風香を乗せて、史伽に手を引かれると
いう奇妙な形で寮へと向けて歩き出した。

「つきましたよ。シキさん」

ここが俺の住むところね。

立派なとこじゃないの。

赤いレンガ造りの寮というよりも城と言ったほうがふさわしい館物がそこにはあった。

「ありがとう。史伽」

そういうと、俺は史伽の頭を撫でた。

「はうー／＼」

史伽は、俺に頭を撫でられると顔と耳が赤くなった。
どうしたんだ？こいつは？

「こらっ！シキ兄僕には僕にはないの？」

はいはいわかりましたよ。風香様。

史伽にしたように風香の頭を撫でて、風香を頭から下におろした。

「でさシキ兄。ここに何の用があんの？」

誰かに用があるのなら、よんでくるけど」

下に降ろした風香が聞いてきた。

そういわれてもな……

「いや、誰も呼ばなくていいよ。

俺、これからこここの管理人として住むことになったから」

「ええええー！！やったあ！？」

そりゃ嫌だよな。

急に俺みたいな得体のしれない男が住むとか言い出したら……
つて、やったあーってなによ？

「ほんとにシキ兄。ここの管理人なの？」

そんなテンション上がらないください。風香さん。

「ああ。近衛の爺さん……いや、学園長に頼まれた」

すると、今まで黙っていた史伽が手をあげた。
はいどうぞ。なんなりと。

「じゃっじゃあ、引越しの用意、わたし手伝います」

「いついや別に」

「僕も手伝うー」

「じゃあ、お姉ちゃんは掃除道具とってきて」

「いや、だからさ」

「了解しました、風香いつきまーす」

ああ、もういいよ。
勝手にやってくれ。

こうして、俺の引越しは双子の力によって半ば強制的に完了したの
であった。

双子と色使い（後書き）

現在連載中の『シキま!?!』ですが、ネギ君を消してしまつたため、主人公が仮契約を原作と同じくらいしなくては、グダグダになりそうなので、アンケートであつた『シキのパートナーは誰?』を『シキのメインパートナーは誰?』に変更します。

もちろん今まで頂いた、アンケートはメインパートナーとして扱いたいと思います。

勝手なことをしてすいませんでした。

これからも、応援よろしく願ひします。

という事で、

『シキのメインパートナー』の案

物語へ対してのアドバイス、希望がありましたら

感想、または、メールボックスまでよろしく願ひします。

再会と色使い（前書き）

色Ⅱ 精霊 and 生命エネルギーです。

再会と色使い

俺の名前は鳴神色。

真正正銘の地球の管理人！

困ったことがあったら

連戦無敗の色使いに任せてくれよ！

人の争いに色使い。

妖怪退治に色使い。

大地の異変に色使い。

水つまりに色使い。

迷子猫の探索に色使い。

なんでもーやーりまーすー色使いー！！

お電話は24時間！

なんでもこいこい色使いまで！！

『なんじゃそりゃああー！？』

なんだ、今の夢は？

すっげえー安っぽいCMみたいだったんだけど……

今ので完全に目が覚めたな。

時計を確認すると5時15分。

確か近衛の爺さんとの待ち合わせが6時だったしちようど良いか。
ベットから降りて、顔を洗うために洗面所へ行く。

その間に今おれがどこにいるか説明しよう。

あの後、俺と双子の鳴滝姉妹で管理人室の大掃除をした。

管理人室は、12畳のリビングを中心に6畳の寝室？和室？台所があり、そこは別に風呂とトイレが完備されている1人でクラスには勿体無い程、大きな部屋だ。

実際、風香と史伽も「シキ兄と、ここに住む」という程だったので、学生たちの部屋よりも大きいんだと思う。

そして、近衛の爺さんが気を使ってくれたのか、元々あったのかは定かではないが、ベットや冷蔵庫、TVといった生活道具まで設置されてあったのは、ミラのせいで、なんの用意もなしに時空転移させられた俺にとっては涙が出る程嬉しかった。

こんなにいい部屋なのに利便性皆無だなんて考えられなかったし。とにかく管理人室を1時間程、掃除すると日もくれてきたので鳴滝姉妹には、次の休みに一緒に遊びに行くという約束をして部屋に帰ってもらい、そのまま俺は寝たら、あの夢を見ておきたという訳だ。

軽いトラウマになりそうで、ちょー怖え。

そして、洗面所で顔を洗い終わった俺はリビングに移動した。

リビングで人さし指を立てて、そのまま虚空をなぞると、そのなぞられた景色だけが歪み漆黒の狭間が生まれる。

すると、その狭間からいつも腰に携帯している筆と上下セットのSPなどが身につけていそうな黒いスーツが現れ、その二つを俺が受け取ると漆黒の狭間は元々なにもなかったかのように元の景色に馴染んでいった。

ちなみに、あの狭間は俺の本来の家に繋がったゲートであり、よく倉庫の代わりとして使っている。

戦闘の時に、色が入ったピンを取り出すのも同じ要領である。

俺は取り出したスーツに身を包み腰に筆を当てて、鏡の前で最終確認をして学園に行くために扉を開いた。

飯はコンビニで買えば良いか。

「うむ。時間ぴったしじゃな」

扉を開くと、昨日と同じいでたちをした近衛の爺さんがいる。

「ああ、おはよ。最悪の目覚めだったぞ」

俺の頭に蘇るのは、あの変な夢だ。

頂垂れている俺を見て近衛の爺さんは笑っている。

「ふおっふおっふおふお。」

何があつたかは知らんが、時間を守った事は感心じゃ。

それでは、鳴神君に伝える事が2つあるから心して聞くように。まず、一つは正式に鳴神君の職員採用が受理されたことじゃ。

そして、もう一つは伝令というよりお願いなんじゃが、今日の始業式には鳴神君には欠席してもらいたいんじゃないか、駄目かのお？」

正式に職員採用って早いな。

まだ、一日もたつてねえんだぞ。

「別に構わないが、どうして？」

「それは、単純明快じゃ。

鳴神君が始業式で教員として発表されたら、生徒達が混乱するからのお。」

生徒達には、徐々に慣らして行こうと思うのじゃよ」「よ

なるほど、俺は地球と同じ年であるのにもかかわらず何故か姿は16〜18歳くらいにしか見えないから、そんな奴が先生として紹介されたら、生徒達が混乱するのも頷ける。

ミラも、この程度のイベントじゃ喜ばないだろうし。

「ならその間、適当に学園散策でもしておくか。始業式の後はどうするんだ」

「理解が早くて助かるぞい。

その後じゃが、10時に2ーAに行ってくれんかのお。

詳しいことは、そこで教員指導のしずな先生に聞いてくれ」

10時ってことは、今が6時だから4時間の自由時間だな。それだけあれば、充分だろ。

「りょーかい。

じゃあ、ちよっくら学園散策でもしてくるぞ」

「気をつけてのお」

そう言って学園長室から出て行った。

時刻は9時丁度。

あれから学園の中を見て回っていたんだが、この学園は最高だ。序盤は、教室や体育館や保健室とか多少豪華なくらいでも、普通の学校ほかったんだが、部室見学をし始めた時に違和感を感じた。部活動数が多いのはいいだろう。

だが、なんだ？あのガンダムでも作れそうな倉庫や設備。昔いったムー大陸並の技術力だぜ、ありゃ。

あれを使いこなせるなら、ココロを持つロボットとかできるじえ。今は、まずこの世界の情報を集めて暴れる時には、ここの技術長を配下にできれば期待できるな。

それからもつと見て回ろうと思ったんだが、生徒達が登校してきたから人が来そうにない奥地の森に避難しているんだが始業式の最中

だし、そろそろ出て行ってもいいのか？
そう思いながら、森を歩いて行くと少し開けた場所に出た。

「いい場所じゃん」

その開けた場所は、森の中にあるから木に囲まれているのはもちろんの事、近くには小川が流れており、何よりもいいのは、その中心に完全木製のログハウスが景色にベストマッチしているのだ。
もっと近くで見えてみようと思えば近づくと思えば視界に麻帆良の制服をきた、金髪の小さな少女がいた。

「おい。」

そのちっこいの始業式いなくていいのか？」

俺の声に気づいたのか少女が怠そうに振り向きながら言う。

「だっ誰が、ちっこいのだ!？」

貴様この私があ…だ…れ……………」

完全に振り替えるとそこには、この世界にきて出会った少女がいた。

「おっ？エヴァリンじゃん。どうしたんだその格好？」

エヴァだった。

エヴァは、怒りに染まった顔を浮かべたり、悲しそうな顔？嬉しそうな顔？困った顔に変わりながら指を俺にさせて口をパクパクさせている。

確かあれから500年たったはずなのに、まったく変わってねえな。

「しっしっシキー!!」

貴様、本物のシキなのか？何故ここにいる？というか何だその呼び名は？」

まー落ち着けよ。

制服着て、そんなんだったら小学生にしか見えねえぞ。

「本物の本物、色使いのシキさんだ。

ここにいるのはミラに飛ばされた後、いろいろあってここで働くことになったから。呼び名は気分だ」

そう言うとエヴァは、突然走ってきて俺に抱きついてきた。

「本物のシキなんだな。………探したぞ」

なんだかよくわからないが、エヴァは俺の腹あたりに顔を埋めている。

エヴァが言うには、俺を探してくれていたみたいだった。

俺は手をエヴァの頭の上に乗せて、撫でながら口を開く。

「なんだかわからないが、ありがとな。エヴァ」

そう言うとエヴァは、小さく頷いてから一歩後ろにさがり、顔をあげた。

その顔は、涙の後が見えるが笑顔だった。

その笑顔に安心して改めてエヴァをみると違和感を覚えた。

「おい、エヴァ？なんかお前弱くなってるないか」

改めて見ると、怪我をしていた時並にエヴァから溢れている色の力が押さえつけられているようで弱々しい物になっているのだ。

呪いの類いか？

「うっ！？それには、訳があるのだ……」

そうして、エヴァはここに入る理由と力の弱さを語り出した。

「ふーん。なら、俺が解いてやるよ。その呪い」

エヴァの話をまとめて見るところなる。

エヴァは、あれからチャチャゼロと世界を旅して回ったらしい。自分から戦いを挑むことはなかったが、真祖の吸血鬼という事もあって襲ってくるものも後を立たずに、その全てを返り討ちにしていたら、いつのまにか600万\$の懸賞首の『闇の福音』として世界に名を知らしめ闇の福音を知らぬものは、いない存在となったらしい。

そこまでは、よかったとエヴァはかたる。

そこからが問題だったようで、500年たってから日本を旅していたら俺に似た男を見つけたらしい。

その男の名はナギ？スプリングフィールド。

その姿は、俺と顔も含めて同じ顔、同じ声、ただ違うのは髪の色だけで俺の白金とは違いナギは、燃えるような赤いかみだったらしい。エヴァは、その男が俺だと勘違いしたらしく追いかけて回していたら、その男に『登校地獄』という学校に通い続けなくてはならない呪いをかけられ、同時に魔力を封じ込められ、今に至るといふ訳だ。

3年で呪いを解いてくれる約束だったのに既に15年たっていて困っているようだ。

だから、俺はその呪いを解いてやると提案したのだが……

「本当か？本当なんだな。

いや本当に決まってる、私の腕を治し龍を召喚できるシキが、あのシキの偽物のナギとか言う小僧の呪いが解けない訳がない。

ハ―ハツハツハツ！？みたか、ナギめ！！シキの方が断然強いのだあ―

すっげえ喜んでるじゃん。

子供のように騒ぐエヴァは、めっちゃめっちゃ制服が似あっていた。

エヴァは、時間が経つ事すら忘れてはしゃいでいる。

ん？？時間？？

「おい、エヴァ！今何時だ？」

「今は時間なんて良い「ああ！？」」ことはないな。

そんな睨むなシキ。丁度10時になっただくらいだ」

やばい！！10時！？

間に合わねえよ、確実にさ。

「悪い、エヴァ。」

呪いを解くのは後だ、今から2ーAにいかなきゃならねえから。
お前も自分の教室行けよ」

「待て、今なんといった？」

エヴァを置いて走り出そうとした俺の後ろから話しかけられ後ろを振り向いた。

「2ーAのきょうし」それは、私の教室だ。シキが何の用がある？」

「ああ、それなら俺が担任になったからだ」

「なっとなんだとお！？」

驚いた顔は500年たっても変わらないのな。

「俺と同じ教室なら、一緒に行くぞ」

そう言ってエヴァを、横にして担いだ。

所謂、お姫様抱っこってやつだ。

「なっとなっとな！？シキイノノいや、じゃないが、でも……」

なに言ってるんだエヴァのやつ？

そして、俺は2ーAに向かって走り出した。

再会と色使い（後書き）

まだまだやってます。

アンケートの内容は……

？シキのメインパートナーは誰？

？おい作者！こうした方が絶対楽しいぞ。

ぜひぜひ感想？メールボックスまでどうぞ。

出会いと色使い

「セーフ」

「アウトです。シキ先生」

ですよねえ。

エヴァをお姫様抱っこしたまま、世界の法則をぶち破る勢いで身体中に精霊やらなんやらを纏わせて走ってきたんだが、元々10時を過ぎていたので遅刻は遅刻だった。

「シキ先生、どうしてエヴァンジェリンさんと一緒なんですか？」

腕のなかには、目をぐるぐる回しているエヴァがいる。

「実は、エヴァを捜していて遅れちまったんだ。

それで、森のなかで見つけたから一緒に連れてきたって訳」

悪い、エヴァ。おれの犠牲になってくれ。

「そうでしたか、ご苦労様です。

でもこれからは、遅れないように注意しましょうね」

しましうね。って幼稚園かよ……

と言っても、さっきから話しているこの人には悪気なさそうだし。

多分この人が爺さんが言つてたしずな先生だろ。
クリーム色の長髪でおしとやかそうな感じ、それに加えての巨乳。
母性本能の固まりみたいな人だ。

「りょーかい。……しずな先生？でいいんだよな。

近衛の爺さんから、詳しい事はしずな先生に聞けつて言われたんだ
けど」

「はい。そんなたいした事はありませんよ。

私はただ、これを渡しに来ただけですから」

そう言う、しずな先生の手にはクラス名簿と英語の教科書の2冊が
握られている。

それを、受け取るうと思つたのだがエヴァで両腕がふさがっている
事を忘れていた。

「おい。エヴァ起きろ」

「……ム…ムリ……目が……まわ…つて……」

完全にグロッキー状態です。

しかしエヴァの奴もまだまだだな、たかが音速くらいで。
仕方ないので、しずな先生をみて見る。

「うふふふ。

エヴァンジェリンさんは、私が保健室に連れて行きますね」

「悪い。ありがとう」

母親のような笑顔を浮かべているしずな先生と、俺の腕にいるエヴ

アとクラス名簿と英語の教科書を入れ替えるようにして交換した。

「いいですよ。」

それじゃあ、私は保健室に行くので後よろしくお願いしますね」

「あいよ。任せなさい」

その言葉を聞くと、しずな先生はエヴァを抱いて保健室へと歩いて行った。

そうして残された俺は、自分が担任となるクラスを窓から覗いて見る。

そこは、パソコンをいじくってる奴？堂々と肉まんを売買してる奴？カメラを弄ってる奴？窓の小鳥と会話している顔にタトゥーをいれてる奴や明らかに中学生離れた奴など、とにかくまともな奴が少な過ぎるクラスの光景だった。

おっ！？鳴滝姉妹もいるじゃん。

普通の奴ならここで大変そうだなとか思うだろうが、俺は違う。

こんなに楽しそうな面子なんだから思う存分遊んでやるさ。

そう心に決めて、教室の扉を開いた……

「……………っ！？」

その瞬間。

頭の上に空気の乱れを感じ上を向くと、チョークがびっしりと付いた黒板消しが俺の頭めがけて落ちて来たが、それをチョークの粉が舞わないように上の部分を掴み下に張っているロープを大きく跨いで教壇へと進み、黒板消しをチョークを置く出っ張りへと戻した。

甘いんだよ。

「おつ出た！麻帆良のパパラッチ」

カメラを弄っていた、ポニーテールの……えーと、クラス名簿……
出席番号3番 朝倉和美だな。

「ここは、私が代表して聞くって事で良いかな？」

『はい』

お前ら、本当に中学生か？

言っておくが幼いのとノリが良いのは違うからな。

「それじゃシキ先生、そういう事だから宜しく」

まー相手が一人の方が良いだろ。

「あい、わかった」

「それじゃあ、最初の質問。」

改めて、名前と身長？体重？血液型を教えてください」

「鳴神色。鳥が鳴く鳴に神様の神に色鉛筆の色で鳴神色。

身長は178cm。体重は58kg。血液型はAB型」

朝倉はどこから取り出したメモ帳に書いている。

「じゃあ、次の質問。趣味はなにかある？」

「そうだな、珍しい物を集めたりする事だな。それか鍛錬」

「ふーん、さっきの黒板消しを防いだもの鍛錬の成果って訳だね。それじゃあ、外国の人なのになんで名前が漢字なの？」

「親戚に日本人がいてなその人が名付け親だったから」

はい、嘘です。ちゃんと理由あるけど面倒じゃん。

「次は、なんでその年で先生やってんの？」

「俺もわからん。学園長に聞いてくれ」

「じゃあ、みんなが気になってる質問。

ぶつちやけ今、付き合っている人とかいますか？」

「いや、特にいないな」

()(よっしやあー!!)()

なんか、急にみんなの目がキラキラしてきて怖いんだけど。どうしたのさ？

「じゃあ、最後の質問。

このクラスでもし付き合うなら誰と付き合う？」

いや、みなさんさらに目が輝いてますやん。

ちよー怖い。

「そうだな。なら、昨日引越しの手伝いをしてくれた風香が史伽で。じゃあ、そろそろ授業するぞ。教科書開けよ」

授業するといつたのに、みんな鳴滝姉妹を見やがって、あいつらなんかしたか？

鳴滝姉妹も、風香はすっげえニヤニヤしてるし、史伽は顔真っ赤にしてブツブツいつてるし熱でもでたのか？

とにかく、このクラス。前途多難そうだなーおい。

くそして放課後く

初授業は、最初こそざわついてたが時間が経つにつれて落ち着きを取り戻して行った。

途中で神楽坂とか言うヤツが寝そうになったので高速のチヨークを額にお見舞いしてやったがな。

それを見たやつは青い顔して震えていたかもしれないが、俺はなんも知らない。

そして、今は授業も終わったので噴水のある中庭のベンチでまったりしている。

んーなんか忘れてる気がするな？

……………あつ！？エヴァか。

まっいいか、明日の朝にでも呪い解いてやるか。

「にゃあー」

ん？？下を見ると猫がこっちを見上げていた。

可愛いな、こつこつ小動物の上目づかいて、なんか癒されるよ。

「よし、おいで」

自分の膝の上をトントンと叩くと、猫がそこ目がけてひとつ飛びで来ると、膝の上で丸くなった。

「みゃーん」

猫の頭を撫でながら思う。平和っていいよな。

ミラもこつこつココロを持って欲しいよ。

「いたーシキ兄ー！！とうー！！」

突然、風香が座っている俺の頭目掛けて飛び乗ってくると、肩車のような態勢になった。

風香さん。軽いからいいけど、重かったら首の骨軽く折れるぞ。

「風香か？どうした？」

「冷静だねーシキ兄。もつと慌てると思ったのに」

こちらら、暇つぶしで世界を脅かしているんでな、ちょっとのことじゃ動じないぜ。

「悪かったな。そういえば史伽は、一緒じゃないんだな？」

「そりゃ、僕達だっていつも一緒な訳ないよ。

史伽は今、あるイベントの準備の真っ最中なのさ、でさ、シキ兄と一緒に来て欲しいところがあるんだけどいい？」

「もうちょっと待ってくんない？ほら猫もいるし」

「みゃー」

だって、面倒じゃん。ここから動くのって。せつかく、猫もいるしことだしさ。

「だーめ。だめなの。行かなきゃ髪抜いてやるんだから」

「あー、わかったよ。いきやいいんだろ。

ほら、行くんだから案内しろよ」

そう言つて、猫を抱き上げて地面に下ろす。

ごめんよ、猫よ。

俺も自分の髪の毛が大事なんだ。

「僕に任せなさい。それじゃ発進」

例のごとく、風香を頭に乗せたまま立ち上がり目的地に向けて歩

きだした。

「おい、風香。ここって教室じゃん」

風香に案内されるがままに歩いて行くと、さっきまでいた2ーAの教室へとたどり着いた。

「へっへっへー。それでいいんだよ。それじゃ心してドアを開いてよシキ兄」

どうせ反抗しても髪を抜かれるんだよな。仕方なくすっげえニヤニヤしている風香の言葉通りに、ドアに手をかけると、覚悟を決めて一気に開いた。

すると、そこには……

『『2ーAへようこそ。シキ先生!!』』

「どうシキ兄？ 凄いでしょ？ 感動した？ 驚いた？

シキ兄の歓迎会だよ」

ああ、確かに驚いた。

目の前には、ところ狭しと置かれたお菓子と料理の数々。

生徒達は手にクラツカーやシャンパンを持ってのお出まし。粋なことしてくれんじゃん。

「はいはい、ぼーっとしないで主役は真ん中だよ」

その中の1人に引つ張られながらも、真ん中に置いてあるイスに運ばれた。

ちなみに、風香さんは頭の上で歌なんか歌っちゃってます。

「シキ先生、これどうぞお」

史伽が、両手で肉饅を乗せた皿を俺に差し出してくれた。それを、受け取って史伽の頭を撫でた。

「ありがとな、史伽。

あと、先生なんて付けなくていいから」

「……はっはい／＼シキさん／＼」

思いつきり赤くなってんだけど大丈夫か？
それから、史伽に貰った肉饅を食べてみた。

「すげえ、美味しいなこれ。こんなの初めて食ったぞ」

一口食べた瞬間に、溢れんばかりの肉汁。
噛み締めば噛み締め程に増す旨み。

今まで言ったどこの世界の肉饅より、確実に美味い。

「それはよかったヨ。これから中華屋台超包子を宜しくアルネ」
「なあに！？これお前が作ったのか？」

「超りんと五月ちゃんにかかれば、こんなの朝飯前だよ」

「ほらほらもつと食べて」

「おー、これも美味いぞ」

「それは、うれしいネ」

「シキ先生ーこっちにも来てー！？」

こうして、2ーA生徒主催の歓迎会は賑やかに始まった。

く一方、保健室では

「っは！？ここは？シキ？チャチャマル？誰かー！！」

小さな吸血鬼が迷子になっていたそうなの。

出会いと色使い（後書き）

まだまだアンケートしてます

?シキのメインパートナーは誰?

?おい作者!こうした方が面白いぞ!

ぜひ、感想またはメールボックスまで

剣士と色使い（前書き）

上手くかけません。

どうしましょ

剣士と色使い

なんでこうなるんだ？

「お前があの時、我が一族を山ごと滅した男だな」

21A主催の歓迎パーティーを終えた帰路。

寮暮らしの連中と一緒に帰るはずだったが、教室を出た途端に新田とかいう中年の先生に捕まってしまった、こんな時間までなにをやっているのかと説教をくらい帰るのが遅くなってしまった。

もちろんその間に、生徒達は帰らせたが。

とにかく、そのせいで時間は11時。

世界樹と呼ばれる馬鹿でっかい神木にかかった時にこいつらに出てわってしまった。

「人違いだ。他を当たれ」

こいつら。とは、いつぞやのように現れた人外の集団である。

ただし今回は、一見するに大小の違いはあれど、そこには鬼と呼ばれる類いの人外しか確認することができない。

とは言っても、その数は軽く100〜200は超える数に思える。

「何をいう！？その腰に付けた筆が何よりの証拠だ」

集団の中でも一際大きい鬼が俺に棍棒を向けながら言う。
「つたく、めんどくさいな。」

こっちは、新田とかいうオツさんのせいで疲れてんだよ。
やるにしても、ここじゃ場所が悪いだろうが？

「だったら、どうするんだよ？」

「こっするまでよ!!」

大きな鬼は、言うが早いか地面を蹴り上げ棍棒を振り回しながら走って来た。

俺と鬼との距離は10m程だったが、鬼はその身の丈に似つかわぬ
い速さで迫り俺のいる場所目掛けて、その巨大な棍棒を振り下ろし
た。

鬼が振り下ろした地面は大きな窪みが出来た。

「なんと、他愛のないこと。真にこの男が我が一族を倒した者なのか？」

しかし、鬼はまだ気づいていなかった。

その窪みに誰もいないことに。

刹那。

「どうでもいいけど、こんな所で暴れんなよ」

「っな!?!」

鬼が後ろを振り向くが、時既に遅し。

俺は、鬼の水月へと純粹な力だけのストレートを繰り出すと鬼は、まるでその場に始めからいなかったかのようになつた。鬼が虚空へと姿を消したのを確認して、集団へ目を移す。

「おい、貴様！今何をした？」

「ただ、走つて後ろに回つて腹殴つただけだ。なに？」

本当にそれだけだ。

確かに鬼には速さがあつたが、所詮は目でおえる程度。

俺も、これでも神様に限り無く近い存在なんだから、あの程度の速さなら風の精霊を身に纏わなくても避けて反撃することなんか余裕でできる。

たしか、虚空瞬動とかいう呼ばれるテクニクだったか？

「んで、どうする？俺も早く帰りたいんだけど」

明日、1限から授業あるのにさ。

てか学園の中に、こんな簡単に進入されていいのか？

俺が、戦場に関係のないことを考えて居ると、それまで様子を見ていた鬼達に動きが見えた。

「えーい、何を！あやつも人間だ！何を臆する事がある？この人数には抗えまい！」

さあ、今こそあの者を亡き者にしてやるぞ！！」

俺が人間ね……

俺からすれば、お前達鬼よりも俺の方が化物だぞ。

そう考えているうちに、鬼達はその圧倒的な物量差を糧に雄叫びをあげ、地を揺らしながら襲い掛かってくる。

結局、戦うのかい、面倒くさいな。

と言ってもここじゃ魔法なんか使ったら隠匿なんてできねえし、色を操るにしても被害は防げないだろう。

でも、素手でこの人数は時間がかかるしな。

ここは、あれでも使ってサクツと終わらせて帰るか。

考えをまとめた時には、もう既に足の速い鬼が目前へと迫っていた。そして、その手に持つ刀を振り上げる一瞬。

その一瞬の間に俺は、虚空を指でなぞり歪んだ狭間を創り出す。

その歪んだ狭間に腕を突っ込み何かを掴み取り出しと同時に鬼は、振り上げていた刀を頭目掛けて振り落とした。

完全に鬼の斬撃が当たったかのように見えたが、立っているのは俺の方で、鬼は胴を境に体を真つ二つにして虚空へと還った。

鬼の攻撃が当たる一瞬、俺は狭間から刀を取りだして居合い抜きの如く鬼の胴を裂いたのだ。

その刀は、前の世界でセフィロスが使っていた2mを超える大太刀、正宗と瓜二つの代物である。

前の世界でセフィロスに見せてもらった際に、土の精霊の力を操り複製された物で、その力は本物の正宗に匹敵する程の力をたずさえている。

一撃、また一撃と鬼から繰り出される攻撃を避けては斬りさりと続けるが一向にその数は減る様子を見せない。

「まったく、きりがねえんだよ！くらいやがれ 八刀一閃」

八刀一閃。

セフィロスが得意とする鋭い斬撃の8連撃を繰り出す技。

その一撃、一撃に触れた者は、息つく暇も無く虚空に還り、その周

りの鬼達も斬撃の衝撃波によって姿を保つ事ができずに消えて行く。これで、相手の数はもはや50程となった。

これが機とみた俺はその場で高く飛び、その長い刀身を持つ正宗を大きく後ろに振りかぶり、体を大きく反る。

「これで最後だ！獄門天照」

振り上げた正宗を上方から斜に鬼の集団へと斬りつけると。

斬撃が巨大な衝撃波となつて、鬼達に直撃した。

その威力は、50の鬼ではたちうちできるものではなく、鬼が消えたかなど確認する必要すらなかった。

「これで終わりか……うわ、これヤバイよな」

鬼達を倒したが、この場で争いをし、大技を2回も繰り出したせいで辺りは土が窪んだりと悲惨な状態になっていた。

これ元通りにした方がいいよな。

そう思うと、腰から筆を取り出し、山を戻した要領で精霊Ⅱ色に干渉して土地を元の形に戻した。

「やっと、帰れるな」

他に見落としたりがないか辺りをぐるっと見回しす。

よし、問題……あったな。

ぐるっと見回した時に世界樹の木の下に2つの人の影を見つけ目があつてしまった。

「シキ先生……ですよね？」

俺に記憶違いがないとすると、
あれは俺のクラスの桜咲刹那と龍宮真名で間違いないだろう。

世界樹の下。

「えーと、見てた？」

「はい」

うわっ！即答ですか？

「いつから？」

「シキ先生が新田先生の愚痴を言いながら校舎からここを通ってきた時からです」

また即答？つてかそれって最初からじゃん。

「見なかった事にはできない？」

「できません」

「龍宮は？」

「無理な話だな」

困った。

俺は別にいいんだが、近衛の爺さんに、魔法関係は隠匿するって言うっちゃったしな。

「なんでお前達はこんな時間にここに？」

「私と真名は、学園長からこの学園の警備を任されているんです。

そして、強い妖気を感じてここに来たのですが、あまりの数の多さに出方を練っていたらシキ先生が現れたというところですよ」

「ん？じゃあ、刹那と龍宮は魔法関係者なんだな？」

「はい、その上で警備をしていますから」

よかったー。

じゃあ、別に怒られはしないわけだな。

あとは、魔法でしたとか言っとけばどうにかなるか。

「なら、問題ないな。」

じゃあ俺は帰るからお前らも早く帰れよ」

そう言って立ち去れ……ません。

後ろを振り替えると、龍宮が腕をつかんでいた。

「あれは、魔法じゃない。あなたは何者だ？シキ先生？」

凜とした瞳を向けてくる龍宮。

そして、同時に言い逃れができない事を確信した。

おそらくこの瞳は、魔眼だ。

「先に言っとくけど、この事は口外禁止だ。

下手したら命に関わるかもしれないけどそれでも聞くか？」

俺の存在を知るといふ事は、世界の秩序に触れるといふ事だからな。

「お嬢様の近くに危険な人を置いておけませんから」

「無論。当たり前だ」

即答ですかい。

「じゃあ、話すぞ……」

……という訳だ。

ちなみにこの事はお前たち以外には、エヴァしか知らないから。間違っても近衛の爺さんとタカミチには言っなよ」

結果、2人には真実を話した。

もちろんミラの暇潰しという事は隠したが、俺が地球の管理人であり神のアルバイトまがいをしているという事や、異世界を渡り歩いているという事や、色の事は隠さずに話した。

「にわかには信じれませんが、あの剣技は異世界の技という事です」

剣技というか、ただの猿真似だけだな。

「だから、シキ先生は人間より自然に近い気配がしたのか」

さすが魔眼。よくわかったな。

まー、色々あったけどとにかくこれでやっと帰れるな。

「じゃあ、今度こそ帰るな」

そう言つて、俺は寮へと……帰れませんでした。

またですかい。

後ろを振り向くと、今度は刹那が腕をつかんでいた。

「シキ先生。私に剣術の指導をしてもらえませんか？

先程の、立ち振る舞いを見て思うに先生は私なんかよりも腕が立つ大太刀の使い手です。

しかもそれが異世界の剣技というならば是非指導して頂きたいのですが」

「そんなことないって、俺のなんてただ振り回してるだけだから」

正直、面倒くさいだけですよ。

人にも教えるのって、難しいのなんのって……

「そんなことは、ありません。

先程の戦いには回避行動からの攻撃に転ずる際に無駄が一切ありませんでした。

その動きだけでも、先生の腕の高さが見えます」

「いや……でもさ……」

「……教えてくれなきゃ、先生の事バラします」

えっ！？脅迫ですか？

意外と黒いな刹那さん。

俺としても居場所がなくなるのは困る。

それだけは、どうしても避けたいところだ。

「わかったよ。そのかわり週に1回だけな」

「はい！ありがとうございます。シキ先生」

はー、なんか甘いよな俺。

でも、刹那も笑顔だし、まーいいか。

そして、ようやく寮に帰れることになったが既に時間は12時をこえていた。

剣士と色使い（後書き）

刹那が黒くなってしまっている！？

どうしたもんか？

まだまだアンケートしてます。

？シキのメインパートナー誰？

？おい作者、こうした方がおもしろいぞ

ぜひ感想またメールボックスまで。

解説と色使い（前書き）

たくさん感想ありがとうございます。

解呪と色使い

朝 4 時 30 分。

私の朝は、いつもこの時間に始まる。

「それじゃあ、いつてきます」

朝の支度を終え、このかを起こさないように小声で朝の挨拶。

こうでもしないと、このかを起こしたら朝ご飯を作るといつて、わざわざ私のためにちゃんとした料理を作ろうとしてくれるから小声なのだ。

作ってくれるのは嬉しいんだけどね。

2月の朝は、すごく寒い。

まだ上りかけの太陽に淡く照らされた外の空気は冷たくて口からは白い息がでている。

「あれ？お前こんな時間に何してるんだ？」

寮を出てすぐに後ろから声をかけられ振り向く。

そこには、昨日来たばかりの担任……鳴神色がいた。

「何してるってバイトに行くのよ。バイト」

まったく朝からこいつを見るなんて嫌になる。

授業中に少し寝そうになっただけで、いきなりチヨークを投げてるし、口は悪いし。

一番最悪なのはこいつが来たせいで高畑先生と離れちゃったことよ。

「ご苦労だな。朝からバイトなんて」

「別に苦労なんかないわよ。

それより、あんたこそなんでこの時間に起きてるのよ?」

「管理人の仕事だよ。

朝っぱらから掃除に、寮全体の光熱費とかの資料まとめ、授業の準備。

こんくらい早く起きなきゃ終わらねえの」

そう言いながら、こいつは箒で落ち葉を集めている。

こいつも大変なのね。

「あんた、その歳で先生とかやって親とかなんか言わないの?」

私が言った途端に、落ち葉を払う手が一瞬止まった。

そして、何事も無かったかのように動き出す。

「いや、俺に親っていないから。わかんねえ」

顔にバカみみたいな笑顔を張り付けて言ってくる。

その顔は本当に、その事を気にして無いかのような顔だ。

どうして、あんな顔ができるの?

「じつごめん……」

私も親がないから、バイトしてるの」

「そうか。なら、頑張れ」

純粹な応援。

同情でも慰めでもない言葉。

親がないとか無しに、こいつは励ましをしてくれた。

「つらくないの？1人で先生なんかやって」

そう言ったら、こいつは突然バカみたいに笑い出した。

「心配してんじゃねえよ。」

親が居るとかいないとかで、人生変わらねえよ。

楽しめばいいんだ。毎日を必死に楽しめばいいんだ。

それに、1人とか言うな。

昨日、お前らに歓迎されたんだから俺にはお前らがいる。
だから、同情なんかされちゃ困る」

こいつの事誤解してたかも……

確かに口は悪いけど、強くていいやつなんだと思う。
まだ分からないけど、そんな感じがする。

「それよか、バイトは行かなくていいのか？」

やばい忘れてた。

「やばいかも。」

じゃあ、いつてきます

シキ先生」

「おう、頑張ってるい」

シキ先生。

こいつが担任なのも楽しいかもしれない。

くシキsideく

「こら、いい加減離れろ!!」

「いやーだー」。

離れたらもとに戻っちゃうー」

「マスター、楽しそう」

「ケツケツケ、コリヤ傑作ダゼ」

なんなんだ、このカオスな状況は？

エヴァは口調まで変わって抱きついてるし。

茶々丸は母親みたいな笑顔を浮かべてるし。

人形の奴は、どこぞの零崎になってるし。

すげえーカオスだ。

こうなってしまったのにも理由がある。

それを語るには、1時間前から話さなくてはならない。

《1時間前》

森の奥に佇む、風情豊かなログハウス。

その前に俺はいる。

明日菜と話してから、まだ時間もたっていないため空はほのかに明るいう程度。

普通、こんな時間に人を尋ねるのは失礼なのだとは思っただが今回は事情が事情なのでこの時間に来たという訳だ。

その事情とは、エヴァの呪いを解くというもの。

何が起るかわからないから、できるだけ人が活動していない時間にやっておきたかったのだ。

「おい、エヴァ！いるか？」

なんでこの家には、インターホンがないんだ？

つまらないことを考えているうちに扉が開いた。

「すみません。

まだマスターは睡眠中です」

耳が特徴的な生徒、絡繰茶々丸が出てきた。
メイド服なのは、なんでなんだ？

「なんで、お前がここに？」

「私はマスターの従者ですので、常にマスターのそばにいます。
シキ先生マスターにご用があるなら、中で待っていてください。
マスターも喜びますから」

従者……パートナーってことか。

確かに力が弱まったエヴァじゃ頼りにならないところがあるしな。

「んじゃ、そうさせてもらっつぞ」

そういつて中に入った。

おいおい、めちゃくちゃファンシーじゃねえか。

広々とした空間にヨーロッパ調の家具が配置されており、何よりも
目につくのが至る所におかれていた人形の山々。

茶々丸の案内のもと、部屋の中央に位置する大きなテーブルの椅子
に腰をおろした。

「茶々丸。俺の事エヴァから、どのくらい聞いてる？」

ここまでスムーズに入れてくれたのも多少はエヴァから、俺の情報
を聞き出しているからだろう。

仮にも従者と名乗るくらいなんだから、俺にだって本来はもっと警
戒して家に入れないのが普通だろ。

「まほネットからの情報では、突然現れ無数の人外を未知の魔法で

倒した要注意人物となってますが、マスターからの情報では、50年前にであった神の使いでありマスターの命の恩人でもあり、姉さんに命を吹き込み、龍を召喚できるとんでもない奴と聞かされています」

ほとんど、言っちゃってんじゃん……

ってか、とんでもない奴ってなんだよ。

吸血鬼で、不老不死も充分とんでもない奴だ。

「姉さんってのは何だ？」

俺が命を吹き込んだのはチャチャゼロのはずなんだが？」

「私はマスターの2代目の従者です。」

なので、チャチャゼロは私の姉にあたるので間違いありません」

人形の従者にロボットの従者ね。

やっぱ不老不死って事なんだろうね。

パートナーとは、別れたくないって奴だな。

「んで、チャチャゼロは今どこに？」

「……………あちらにいます」

辛そうな面持ちで指を指す茶々丸の先には、糸の切れた操り人形のようなチャチャゼロの姿があった。

エヴァの魔力が封印されたせいでチャチャゼロに廻る魔力が無くなったから、もとの人形のあるべき姿に戻ったというところか。

俺は立ち上がり、チャチャゼロの所まで歩いて行く。

そして……

「起きやがれ、この野郎ー」

殴った。

すると……

「オイ、旦那。

500年振りノ再開ニ拳骨ハナイダロ？」

喋った。

殴ったのと同時にチャチャゼロに与えた、俺の色の力を共鳴させてチャチャゼロは復活した。

もちろん共鳴しつづけなきゃいけないので俺が近くにいればという条件付きの復活という事になるが。

「うるせー、俺にとって時間は些細なもんなんだよ」

「ケツケツケ、サスガ旦那ダゼ」

チャチャゼロはそう言いながら飛び、俺の頭の上に乗ってきた。俺の頭の上は小動物に人気なのか？

その様子を見ていた茶々丸は少し嬉しそうだった。

「勝手に復活させたけど、いいよな？」

「きつとマスターも喜びます」

『誰が喜ぶだつて？』

後ろに振り返ると2階に、ネグリジェ姿のエヴァが見える。

「おはようございます。マスター」

「おはよ。エヴァリン」

「久シブリダナ、御主人」

上から茶々丸、俺、チャチャゼロの順だ。

それに対してエヴァは俺を睨んでいる。

なんかしたか？

「おい、シキ。」

チャチャゼロを助けてくれたのは礼を言おう。

だがなぜ昨日、私を朴って帰ったのだ？

おかげで誰もいない保健室で茶々丸が来るまで一人つきりだったのだぞ！！」

寂しかったのかよ。

真祖の吸血鬼がこんなんでいいのか？

「悪かった、あやまる」

「ゆるさん」

「そっか、なら帰る」

「へっ！？いや、そんな…」

「冗談だ」

「ケツケケ、御主人イイ顔シテタゼ」

「シキー。貴様という奴はー！このっこのー！」

おい、恥ずかしいからって殴るなよ。

「マスター、楽しそう」

茶々丸さん、笑ってないで止めとくれ。

最初はポコポコという感じのエヴァのパンチだったのだが、次第に体を半身にし重心を低くして拳を出すとともに反対の手を引くという、熟練された拳へと変わってきたのだが……

いや、マジでいたいよコレ。

見た目が幼女でも、力は吸血鬼だからね。

「ちえりおっ！！ちえりおっ！！」

今度は、お前が奇策士みたいな気合の入れ方がよ。

それにしても、もう我慢の限界だ。

俺は手をゆっくりとエヴァの頭の上におき、少しばかりの怒気を放って口をひらく。

「エヴァ…吸血鬼って、不老不死なんだよな。

圧死溺死撲死干死刺死益死獣死水死壊死安楽死病死焼死餓死捻死突然死激突死窒息死撲死転落死斬死轢死感電死……

とかでも死なないのかな？エヴァ？」

「ふにゃー！？」

奇妙な悲鳴をあげ、俺からシュツという効果音が聞こえて来るかのような身のこなしで離れて行くエヴァは、壁に背中をあずけながらも引きつった顔でガクガク震えながらこっちを見ている。そんなに、怖かったか？

「冗談だ。

殺しにきたんじゃないやなくて、呪いを解くに来ただけだ」

「シキが言つと冗談に聞こえんのだ…
それより呪いを解いてくれるのだな!？」

引きつっていた顔は、体躯に似合う満面の笑み。
震えていたのも、歓喜で震わせて全身で喜んでいる。

「んじゃあ、こっちに来なさい」

「はあーい」

そんなに嬉しいのか。

キャラ変わってるのに気づいてないのかい？

そんな俺の心配など関係なしにエヴァはトテトテと走って来る。
いつもこうなら可愛いんだけどな……

「よし、それじゃ動くなよ」

腰から筆を取り出し、空をなぞって虚空の狭間を作り出す。
そこからでて来たのは白？白？青？緑の4つのビン。
例の如く、ビンから溢れ出る光を筆で混ぜ合わせて、新たな色を創り出していく。

そして現れた淡い蒼でエヴァの体位の大きさの魔法陣を描く。

「白？白？青？緑の4重色　苦しみに癒しを　呪縛から解かれよ
エスナ」

それと同時にエヴァの体が緑色に輝く。
緑色の輝きがおさまるとエヴァの周りの温度が急に冷えてきた。

「はっはっははは!!遂に復活したぞ!!」

見たかナギ、お前の呪いなんぞシキの敵ではないわ!！」

うわっ!痛いぞそのセリフ。

そして、魔力を暴走させるな。

「よかったです、マスター。

ありがとうございます、シキ先生」

「おう、気にするな」

茶々丸は礼儀正しいってのに、エヴァはチャチャゼロをぐるぐる回して遊んでるし。

まあエヴァも楽しそうだし、いいか。

「そんじゃあ、今日の授業の準備あるから帰るぞ」

「そんな事、どうでもよいじゃないか。

それより、今から祝杯だ!呑もう騒ごうじゃないか!！」

「はいはい、放課後にでもまた来るよ」

そうして、はしゃぐエヴァとチャチャゼロとそれを見つめる茶々丸を背にファンシーな家から出た。

しかし、神様はそう簡単には帰らせてくれなかった。

ログハウスから出て森の小道へと入ったそのとき……

『「いやああああー魔力がああー!?!」』

ん???なんだ?

「エヴァ。」

俺はまだこの世界の魔法の事をよく知らないから、制限ありの解呪をすることしかできない。

だから、待ってくれないか？

これからこの世界の魔法の事を理解したら完全な解呪ができるはずだから」

そしたら、急にエヴァが抱きついてきた。

「ならば、こうしておればいいのだ。さあもう一度呪いを解け」

いや、お前バカだろ。

このままでずっといられるかっての……

「こら、いい加減離れる！！」

「いやーだー」

離れたらもとに戻っちゃうー」

「マスター、楽しそう」

「ケツケツケ、コリヤ傑作ダゼ」

そうして、今に至るといわけだ。

とにかく、エヴァには俺がこの世界の魔法を理解するまで待つてもらうしかないだろう。

まあ、チャチャゼロくらいなら、誤認魔法をかければ一般人にはバレナイだろうからそれでいいかもしれないが……

「とにかく、今はまだ無理だ。」

夏休みくらいまでにマスターしてやるから待ってる」

「……わかった。必ず夏休みまでに解呪してくれよ」

ガクツと頂垂れて、しぶしぶ一足下がったエヴァ。

そして、それと対象的にエヴァの腕の中にいたチャチャゼロは跳んで俺の頭の上に乗ってきた。

「旦那ノ近クニイレバ、動ケルンダロ？」

頭の上から足をブラブラさせながら聞いて来るチャチャゼロ。

「そうだな、誤認魔法さえあればバレないだろうし大丈夫だろ」

「ケツケケ、ジャア、ソウイウコトダカラ御主人。」

オレハ御主人ガ復活スルマデ旦那ノトコニイルカラナ」

それは、つまりチャチャゼロの条件はあれど自由を意味する。

つまり、エヴァよりも先に従者であるチャチャゼロが呪いから解放されたことを意味するのだ。

『そんなー、チャチャゼロだけじゃないぞおー!!』

悲しい吸血鬼の声は森中に響いたそうだ。

解呪と色使い（後書き）

エスナ

FFより 白魔法

あらゆる状態異常を回復する魔法。

本来は白？緑なのだが、ナギのあまりにも馬鹿げた力のために今回は白と青で増強させたかたちになる。

明日菜のフラグを立てて見ました。

やはり物語を進めるには明日菜がいないと難しいですから。

まだまだアンケートやってます。

？シキのメインパートナーは誰？

？作者へのアドバイス

などがありましたら、感想またはメールボックスまで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6046j/>

シキま！？

2010年10月10日16時39分発行